
幸せになれるかもしれない世界で

あじゅ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幸せになれるかもしない世界で

【Zコード】

Z0123V

【作者名】

あじゅ

【あらすじ】

「うずまき一家の幸せ探し。ある世界で、子には親がいなかった。ある世界で、親は生まれたばかりの子を失った。その一つが交わった時、もしかしたら幸せが見つかるかもしれない。不思議な形で巡り会った家族の運命は？」この話は妄想とねつ造の宝庫です。

基本的にうずまき一家 + 力カシで話は進んでいきますが、進行状況によつては他のキャラも登場させる予定です。少年漫画的なバトルシーンやドキドキハラハラ展開はありません。

1（前書き）

はじめてみましたナルト一次連載。テーマは家族愛。付き合ってい
ただけたら嬉しいです。

毎日毎日、苦しくて仕様がなかつた。

毎日繰り返される暴力の意味を、子供は知らなかつた。外を歩くたびに向けられる冷たい目も、小声で交わされる冷たい言葉たちも、なぜ自分に向けられるのか、わからなかつた。

ただ一つ、その仕打ちの中でわかつたことは、自分はこの里の人々に嫌われているということだけだ。

里人に殴られるとき、痛くて泣きわめくと、激しく怒鳴られ、さらにはひどく殴られた。だから子供は、どんなに殴られても我慢しようとした。一生懸命我慢していれば、そのうち里人飽きてどこかに行ってしまう。泣きわめく時と比べると、ずっと早くに解放される。だから我慢することを覚えた。

幸い、と言つていいいのか、子供の体は丈夫だつた。体中アザだらけになつても、次の日には綺麗に治つている。子供にとつてそれは普通のことだつたが、彼の事情を知る里人からはさらに気味悪がられた。なぜそう思われるのかも、子供には分からぬ。子供の周りには、その治りの速さが異常だと教えてくれる人はいなかつたから。

だけど、どんなに治りが速くとも、痛くて、痛くて。身体だけじ

やなく、心臓の辺りがじくじくと痛くて。子供は、誰もいなくなつてからこいつそりと泣いた。次の日になつたら身体は痛くなくても、心臓は痛いままだつたからせらうに泣いた。

もう苦しくて苦しくて、泣くことにも疲れてしまった。

その日も、子供は里人に殴られていた。

里の中の公園に一人で居たら、数人の里人に連れだされ、表通りからは見えない路地の隅に連れ込まれ、殴られた。

痛い、ヤメテと叫びたかつたけれど、叫んだらもつとひどいことになるのは知つていた。だから黙つて痛みに耐える。

たくさん我慢して、やつと解放された頃には口が暮れていた。

体中痛くて動けなかつた。口の中が切れてしまつたらしく、鉄の味が舌に広がつて気持ち悪い。

動かない身体を何とか動かして、うつぶせの状態からぐるりと反転させると、星空が目に飛び込んでくる。黒と言うよりは紺色に近い夜空に、白い星が点々と輝いていた。

お星様は願いを叶えてくれる。三代目火影のジッチャンが、ずいぶん前に教えてくれたことを思い出した。それは正確には流れ星の

話だったが、子供の記憶力はあまりよくなかった。

(おほこむき、もしかなうなら・・・)

意識が朦朧としていく中、子供はぼんやりと“願った”。

(一回でここから、父ちゃんと母ちゃんと、会わせてほしこってば
よ)

そこでプリッシンと子供の意識は途切れ、雲のように流れた星に、彼
が気付くことはなかった。

*

はたけカカシは、血なまぐさい自分の臭気に耐えながら木々の間
を走り進んでいた。音もなく気配を殺し、夜の闇に身をなじませる
ように素早く。動物を模した面と一般的の忍とは明らかに違う形状の
暗部の忍服には、赤い血がべつとりと張り付いていた。

今日の任務で返り血を浴びた。しくじつた、としか言ひようがな
い。血の強い臭気は追手を引き寄せる。自然と、任務終りの足は逃
げるような足取りになった。今回の任務の標的は、その周りも含め
すべて始末してきたが、それでも足は安心してくれない。

(忍たるもの平常心
だよね)

そう思いながらも、カカシが一息ついたのは木の葉の“あん”と書かれた門をくぐつてからだつた。自分の未熟さを感じずにはおれない。早く火影への報告を済まして、修業をしたかった。任務で体は疲れていたが、心は休息を求めていない。こんな時はどうやっても寝付けないだろうから、どうせなら身体を動かそう。

そうやつて今夜の予定の算段を組み立てつつ走つていると、夜の闇に似合わない金色が、視界の隅に入ってきた。一瞬氣のせいかと思いつり過ぎたが、その明るい色がどうしても気になつて引き返す。そして、路地の隅に太陽も見劣りするような鮮やかな金色が、気の所為でなくそこにいた。

「・・・子供？」

小さな金色の子供が倒れていた。なぜこんなところに、と浮かんだ疑問。首をかしげつつも子供の容体が気になつて駆け寄り抱き上げると、カカシの両手に收まりそうなほど小さな子供の体は、ぐつたりとしていた。その様子にぎょっとして子供の顔を覗きこむと赤黒く腫れあがつてあり、身体のあちこちも同様に腫れていた。骨が折れているのも見てとれる。

ひやりと、カカシの背中に冷たいものが流れる。

気が付けば、カカシの足は病院に向かっていた。

急患として運び込まれた子供は、すぐさま集中治療室行きとなつた。その中、ガラスの向こう側で処置されていくその姿は痛々しい。怪我は見慣れているつもりだったが、子供が傷つくことにはどうしても慣れることが出来ない。

「あの、すみません」

ガラス越しに金色の子供を睨み付けるように見つめていたら、看護師が遠慮がちに声を掛けてきた。彼女の視線が自分をうかがうような様子を見て、カカシは自分を見下ろして、「ああ」と納得する。人を殺した暗部が、清潔な病院の中にいられるのは迷惑でしかないのだろう。自分の姿はそれくらいひどい。カカシにとつても、この血の臭気は不浄だ。

「火影様に報告を終えたら、また来ます。あの子のこと、よろしくお願ひします」

軽く会釈してそう言いつと、看護師は明らかにホッとしたようで小さく笑つた。一応彼女に暗部である自分がはたけカカシであることを告げて、集中治療室に背中を向ける。

正直、これ以上見ていられなかつた。

病院から出て、火影邸へ向かつために走る。とりあえず今は、任務の報告のことだけ考えていよい。

火影邸に到着し、中の光が灯つてることを一応確認してから、火影室の扉を一度だけ叩いた。「入れ」と短い声が返つてくる。音もなく扉を開けて進み出て、積まれた書類を片付けている火影に声

を掛けた。

「四代目様」

眩しいほどの金色が、その声に揺れた。湖面のように静かな青い瞳がカカシを捉えると、僅かに細められて微笑の形を取る。

「ん！ カカシくん。御苦労さま！」

その色に、カカシは先ほどの子供を思い出した。

1 (後書き)

正直ここに投稿していいのか悩みました。この先不適切な内容だと判断された場合は、ご一報ください。すぐさま削除いたします。

子供には両親がいなかつた。自分がこうしているのだからその存在は確実にあるはずなのに、姿かたちどころか、父母の名前さえ、子供に教えてくれる人はいなかつた。

他の子たちには当たり前にいる父と母という存在に、子供は焦がれた。親子三人で歩いている家族の子供が、羨ましくてたまらなかつた。

そんなある日、子供が見つけたのが火影室に掲げられた写真の一枚。子供に唯一優しくしてくれた三代目のジッチャンは、「歴代の火影だ」と教えてくれた。中でも四代目の火影は、四年前不意に訪れた九尾の妖弧から、里人を命を張つて守つた英雄なのだと教えてくれた。

一番端に置かれた四代目の凛々しい顔は、子供の目から見ても美しいかった。そして何より、目を引く金色の髪と青い目。それは奇しくも子供と同じ色だつた。

その共通点に、子供は喜んだ。英雄と外見が少しでも似ているなんて！それは子供の数少ない自慢になつた。

そしていつの間にか、子供は四代目火影のことを自分の父のように感じるようになつっていた。心の中で、どうしても苦しいときに甘える偶像に四代目火影を当てはめた。誰にも話したことのないその秘密は、小さな子供の小さな心の支え。

母の面影はどうやっても思い浮かべられなかつたから、“女人の人

”という漠然としたイメージを膨らませた。心の中にだけいる、一人の大切な人たち。もし一人が現実にこの世界に居て、自分を抱き締めてくれたらどんなに幸せだろう。無条件にぬくもりをくれる存在を知らない子供は、その一人と幸せに暮らせる妄想を膨らませては自分の現実から目を逸らした。

もうじやないと、立つていられなかつたから。

黒く塗りつぶされていた視界をゆっくりと開ける。一番に空が見えると思ったのに、そこには見慣れない天井だつた。なぜ、と疑問に思うのもつかの間、体中にギシリと鈍い痛みが走る。あんまりに痛くて、泣きそうになつた。

「あ、起きたね。動いちゃダメだよー、怪我が悪くなる」

聞き慣れない声に目だけ動かすと、銀髪の男が笑っていた。顔のほとんどを口布と額当てで隠しており、唯一見えている右目が弧を描いている。

「今医者を呼んでくるから、待つててね」

そう言いながら男は立ち上がり、子供の頭を優しく一度だけ撫でると部屋から出て行つた。その背中を声も出せず見送る。

「」の状況の、何もかもが不思議だった。寝て起きていたらいつも

は治っていた怪我が未だに痛むこともそうだし、何より、見知らぬ大人に優しくされるのが一番不思議だった。

ぼんやりと天井を眺めていると、やがて男と一緒に医者がやってきて、いろいろと調べられた。医者は最後に覆面男と一・三言葉を交わすと、子供に「お大事にね」と笑いかけて部屋を出て行く。

「あとしばらくは入院だつて」

男は眉を下げてそう言って、ベッドの脇に腰掛けると手元の本を読み出した。男に聞きたいことが山ほどあるが、身体が痛くて口を開くのも億劫だ。疑問がいっぱいでも、口が動かない。それに段々眠くなってきた。頭の中に靄がかかつていくようで、段々目を開けていられなくなる。

子供は男に質問することを諦めて、今は眠ることにした。

*

十月十日。

それは、とても特別な日だ。

波風ミナトは書類整理に追われながらも、四年前のこと思い出

していた。

ミナトの妻、クシナは九尾の人柱力である。その彼女と自分の間に子供が出来たと聞いたときは素直に喜んだが、同時に不安を覚えた。

尾獣の封印が最も緩むのが、出産のときだ。今まで成功例がなかったわけではないが、一步間違えれば母子ともに命を落とすことになりかねない。クシナの笑顔を見ながら、胸中に渦巻く不安はビビりしても消えてくれない。

だからこそ、ミナトは最悪の事態を免れるために様々な下準備を行つた。渦の国から学んだ封印術を始めとした、様々なことを。自分たちの幸せな未来のために、多くの努力をした。

のに。

クシナの出産時、緩んだ封印から九尾のチャクラが漏れ出た。一瞬赤いチャ克拉が狐の尾の形を作つた時は、最悪の予想が頭を駆け巡つた。封印を施すためクシナのお腹に添えた手に、力がこもる。

結果として、九尾の暴走はなく、無事に漏れ出了チャ克拉の封印にも成功した。渦の封印術は有効だつたようだ。ふつと安堵して額に浮かんだ汗を拭つていたら、三代目の奥方が取り上げた赤ん坊を、悲痛そうな表情でクシナに手渡しているのが見えた。

部屋の中がやけに静かなことに、そのとき気が付いた。

赤ん坊が泣いていなかつた。代わりに、クシナが泣いている。

「ナルト・・・、ナルト・・・」

まだ温かい小さな、人形のようにならぬナルトを抱いて、クシナが泣いていた。何が起きたのか分からぬ。呆然としていると、クシナの傍らにいた奥方がこちらに近寄ってきた。

“九尾のチャクラが、赤子を殺したのだ。”

死刑宣告のような奥方の声が、ミナトの鈍つた聴覚を震わせる。

全身の血がなくなつていくような感覚がして、ミナトは立つてられないくなつてその場に崩れ落ちた。何とか這いずつてクシナの腕の中を覗きこむと、白い顔をしたナルトが、静かに眠つている。

「ナ・・・ルト・・・」

喉がひり付いたように痛んだ。金色の髪をした我が子の姿が、視界が歪む。目の前の現実を拒むように、ぐにゃぐにゃと歪んでいく。

「あああ・・・、ああ・・・」

クシナごと、ナルトを抱き締めた。一人の体温を分け与えて、冷たくなつていく我が子に奇跡を望むように。

しかし、ナルトが目を開くことは、なかつた。

「」。

扉を叩く音が聞こえて、ミナトは思索から顔を挙げた。「入れ」と告げると、暗部姿のカカシが音もなく入ってくる。途端に鼻についた血の匂いに、思わず眉を寄せた。

「御苦労さま、カカシくん」

言いながら、思ったよりも帰還が遅かつたな、と考える。任務の報告を一通り聞いてからその疑問を投げかけると、カカシが面の向こうで困った顔を作ったのがわかった。

「帰る途中、里の中で怪我をした子供を拾いましたので」

「子供?」

「はい。ひどい怪我だったので、病院に連れて行きました。どちら、誰かに暴行を受けたようです」

「・・・ふむ」

何か事件性を感じる。後でフガクに調査の打診をしておいた方がいいだろうか。うちは一族が身にまとう警務部隊の制服がミナトの脳裏に思い浮かんだ。

「ちよっとあの子の様子が気になるので、見てきます。では、失礼します」

力カシが会釈して帰つていいくのを見送つてから、フガクへの書類を作成しようとも思ったが、ミナトは手元の書類をまとめてファイリングし、それらを明日に回すこととした。今日はなるべく早く帰らなくてはならない。ミナトは急いで帰り支度をして、皿モヘと足を向けてた。

帰りにケーキ屋で小さなケーキを買って、それから力エルの小さなぬいぐるみも買った。ケーキには名前を書いたチョコプレートを付けてもらつたし、ぬいぐるみはプレゼント用に包装してもらつた。

ケーキを崩さないよう、そこからはゆっくりと歩いて帰る。その途中の商店街で、夜目にも目立つ赤い髪を見つけた。帰り道で会えるなんて嬉しい偶然だ。よく見知った後ろ姿に、ミナトは弾む声を掛けた。

「クシナ！」

振り向いた妻は、ミナトを見つけると柔らかく笑つた。

「ミナト。おかえりなさい」

彼女の腕には大きな紙袋が抱えられている。「一つあるつひとつ

を彼女の手から取り上げたら、また嬉しそうに笑ってくれた。

「お仕事お疲れ様。それ、ケーキ?」

「ん、そうだよ」

彼女に見せるように掲げたが、その拍子に紙箱が揺れたのを見て慌てて腕を下ろす。中のケーキの無事が気になつた。

「そのバランス感覚、火影が聞いてあきれるつてばね」

「だつて、食べ物の扱いには慣れてないから」

クシナの苦言に反論しつつも、なんだか情けない気持ちになる。

やがて着いた自宅に一人で「ただいま」を告げ、台所へ荷物を置くと、クシナは早速材料を広げて料理を始めた。それを横目に、ミナトは家の奥にある仏間へと向かう。仏間の中、床の間には小さな仏壇が置かれていた。その前に腰掛け、線香に火を灯す。いつの間にかこの部屋に染み込んだ線香の匂いが、ふわりと強くなつた。

ミナトが手を合わせる仏壇に、遺影はない。ナルトは、クシナの体から出た直後に息絶えた。生きて元気な姿を映した遺影を、用意できるはずがなかった。

線香の横に、買ってきたケーキが入った紙箱とプレゼントのカエルを置く。カエルも今年で四匹目だ。昨年までのカエルのぬいぐるみ三匹は、既に黒い仏壇をにぎやかに飾つていた。

しばらくすると、台所からいい匂いが漂つてくる。今日は御馳走

だ。あの十月十日以来の恒例である。クシナの料理の腕も毎年上がつてきていて、どんどん豪華になつてゐる氣もある。

「ミナリー、ちやぶ組出しておいてー」

「んー。わかつたー」

台所からの声に、茶箪笥の横に立てかけてあつたちやぶ台を組み立てる。それは広げると狭い仏間の半分を埋めてしまつた。こんな狭い部屋で「じめん」と心中でナルトに頭を下げる。

廊下からカチャカチャと言う音が近づいてきたので戸を開けると、仏間の入り口に大きなお盆を持ったクシナが立つていた。お盆の上には、唐揚げやエビフライにハンバーグ、そしてカレーまで、子供が好きそうなメニューがずらり。栄養を考えてか、野菜がぎっしり詰まつた大きなサラダボウルもある。クシナが重そうにしているので運ぶのを手伝つて、食卓を一人でセッティングした。

仏壇の前に、子供用の小さなフォークとスプーン、用意された食事が全部乗つたプレートとプリンを置いて、仏壇にあつたケーキをちやぶ台の真ん中に持つてくれば、準備完了だ。

「ロウソク付けもらつた?」

「大丈夫、ちやんとあるよ」

自慢げに細いカラフルなロウソクを取り出して、慎重にケーキに四本差した。ライターで火を灯すと、薄暗い部屋にぼんやりとクシナの顔が浮かび上がる。ケーキには、「ハッピーバースデー ナルトくん」と書かれたチョコプレートがのつていた。

「誕生日おめでとう、ナルト」

「四歳ね・・・」

そんなクシナの涙声。彼女が泣いている。鼻をすすぐあげ、落ちる涙を消そうと懸命に目元を擦っている。それに何の声を掛けることもできず、自分の不甲斐なさにミナトは下唇を噛んだ。

「 消す」

「・・・、うん・・・」

一人で口ウソクを吹き消す。

今日はナルトの四度目の誕生日で、四回目の誕生日だった。

2（後書き）

転生ものとは少し違う、並行世界を描いているつもりです。しかし
で不適切な内容だと思われた方、お知らせください。

子供が病院に搬送されてから四日目、怪我による発熱で一時混迷を極めたという子供の容体は安定し、食事を取る許可が下りたと病院から電話がきて、カカシは子供のもとへと急いだ。

あの子供の名前はまだ分からぬ。身元が判明しなかつたそうだ。木の葉の中で子供の行方不明の通報はなかつたし、里外で行方不明の子供とはその外見的特徴が一致しない。残る手掛かりは、子供自身が持つていてる情報だけとなつていた。

その子供と言葉を交わした、と言うか話しかけたのは彼を拾った次の日の夜だけだ。カカシは一瞬だけ目覚めた彼に声を掛けたことを思い出す。それ以来任務がたてこんでいて来られなかつたが、今日はどうにか休みをもらつて昼間から病院に行けた。このチャンスに、あの子供の声をどうしても聞いてみたかった。

カカシは、なぜあの子供のことをこんなに気になるのか、自分でわからぬ。金色に惹かれたのか、それとも他の理由か。考えつかないし答えを出す必要性も感じていないので、その思考はすぐには捨ててしまつたが。

病院に着き記憶にある病室の扉を開けると、子供はベッドで上半身を起こして窓の外を見ていた。表情もなく窓を見つめている子供らしからぬ雰囲気に、言い知れない不安がよぎる。怪我をしていて元気なはずはないが、子供は明るい方が安心するものだ。

「やあ」

「ひらりに気づいていない様子の子供に声を掛けると、弾かれたように綿毛のような金色がカカシへ振り返った。青空の青より濃い色の瞳が、驚いたのか見開かれている。

「やつと起きたんだね。よかつた、安心したよ

返事をする様子がない子供に話しかけながら近づき、ベッドサイドのパイプ椅子に腰かけた。相変わらず驚いた顔のままの子供にニコッと笑いかけるが、表情に変化はない。困ったな、と内心焦る。どう「ミコニケーションを図つていけばいいか分からなかつた。もともとカカシは子供が苦手だし、人に積極的に声を掛けるタイプでもない。どうすればいいか迷いに迷つて、カカシは自分の顔を指差した。

「オレ、はたけカカシって言うんだけど、名前」

「・・・カ、カシ？」

「そう！カカシ」

子供が口を開いたことが存外に嬉しかつた。いつもはのらりくらりとした調子を保つている声が弾む。

「お前の名前はなんてーの？」

「つずまきナルト、だつてば」

上機嫌のまま聞くと、金色の子供は名乗つた。ナルト、と口の中で何度か確認して、子供の名前を心に刻みつける。

「ナルトね、ようじく」

「うん、カカシ、にーちゃん？」

「カカシにーちゃんか。悪くないねー」

ずっと大人に囮まれて育つたカカシは、兄と呼ばれることには慣れていない。どこかこそばゆい気持ち嬉しくなつてナルトの頭を撫でて、見た目の印象よりも柔らかい毛触りに、思わず確かめるようにもうひと撫で。

「や、やめろってば」

「えー」

照れたのか顔を赤くしてカカシの手を振り払うナルトが、急に子供らしく見えてホッとした。しかし手を振り払われたのが本気で残念で不満を口にすると、ナルトにはプレイとそっぽを向かれてしまった。

そうやってナルトとじやれ合っていると、看護師が食事を運んできた。何度も入院生活をしているカカシには見慣れたカートから出されたのは、たまご粥とほうれん草のお浸しという、非常に質素なものだ。今まで体力が落ちていた所為で食事どころか水分も点滴で取っていたので、それは子供にとって少なくとも四日ぶりの食事だった。少々質素すぎる気もしたが、空っぽの胃には丁度いいのだろう。

ナルトは久しぶりの食事に興味津々の様子だった。

「ゆづくつ食べるのよー」

柔和そうな中年の看護師の言葉に、ナルトは大きく頷いている。しかしその視線はまだ粥に注がれたまま。お預けされた犬のようで笑ってしまった。

看護師が出て行くのを見送つてから、ナルトは左手でスプーンを持った。右手は骨にヒビが入っているため、ギプスで固められているので使いものにならない。それがわかつても、一瞬右手でスプーンを取ろうとしたのを見て、ナルトは右利きなんだな、と推測する。

案の定左手では食べにくいらしく、スプーンにのせた粥がほとんど口に入つていかないで、ぼろぼろ零れて行く。「あらり」眉を下げて、見かねて器とスプーンをナルトから取り上げた。

「あ、オレのだつてばよー！」

「分かつてるよ。食べさせてあげるから、ね？」

カカシのその言葉に、ナルトはほけっと間抜けな顔をした。その顔がどうにもおかしくてくすくす笑うと、馬鹿にされたと思ったのか、ナルトの丸いほっぺがさらに丸く膨らむ。さらに笑う要素にしかならないことを、この小さな子どもは気付いていない。

「そー、食べよーね」

手の中の小さいスプーンは、カカシの大きな手では存外に扱うのが難しかった。忍具の扱いは人一倍上手いこの手にも、向いてないことがあったなんて。落胆よりはくすぐったい気持が溢れて来くる。

もし自分に子供が出来たら、こんな気持ちになるんだろうか。

「はい、アーン」

ナルトは未だにほつぺを脇らませていたが、田の前に出されたスプーンにそれをしぶませて、パクッと食いついた。

「おいしい？」

「・・・味があんまねえってばよ」

「ま、病院だしね。我慢するしかないよ」

もぐもぐと口を動かすナルトを見ていると、雛鳥に餌をやる親鳥のような気分になつてくる。特に悪い気はしない。むしろ、もう数年来感じていなかつた気持ちが溢れてくる。

野菜は苦手だと難しい顔をしたナルトのために、看護師から借りた果物ナイフでほうれん草を細かくし、たまご粥に混ぜた。緑色になつた粥にナルトはさらに苦い顔をしたが、口にしてみると思ったよりおいしかつたらしく全部平らげてくれた。空の器に満足して頷く。

「カカシ」「一ちゃんは、『飯は?』

デザート代わりの乳酸菌飲料のパックのストローを吸っていたナルトが、おもむろにそう聞いてきた。実は何も食べていなかつたが、「大丈夫よ」と誤魔化す。子供に入らない心配をかける必要はない。

そこで、思い出したようにカカシは一つ手を打つた。

「そーだ、ナルト。ちょっと聞きたいことがあるんだけど、いいかな？」

カカシの足取りは重い。今は病院から家への帰途についているところだ。その歩きは速さこそ通常通りだったが、足を動かすのが億劫でしかたなかつた。足を動かすことより、頭を動かせることに集中してしまいたい。

あの食事の後、ナルトの身元をはつきりさせるためどこに住んでいたのか直接聞いてみた。子供と言えど、何か手掛けかりになることを言つてくれるの期待して。そして、それに対してもうほんとハツキリとした答えが返ってきた。その内容が、「三代目のジッチャンのおうちだつてばよ」じゃなかつたら、素直に喜べたものを。

「三代目のジッチャン」とは、猿飛ヒルゼン様のことだろう。今は引退しているが、かつて三代目火影としてこの里を仕切っていた御仁だ。“自分には両親がないから三代目の屋敷に住まわせてもらつていた”とナルトは言つていたが、おかしな話である。両親がない子供が育つ場所なら、木の葉にだつて孤児院という場がある。なにより、三代目の屋敷に孤児みなしこが身を寄せていたなんて話、聞いたこともない。それがもし事実だとして、暗部に所属している自分の耳に噂としても入つてこないとは、奇妙だった。

さらに誰に暴行を受けたのかも聞いてみた。これが一番重要な質

問だつたが、それにナルトは「覚えていない」の一点張りだ。

（もしかしてナルト、記憶喪失とか？んー、今度調べてもらわないとなあ・・・）

カカシは頭を抱えた。あの子供について、わからないことが多い過ぎる。いろいろと調べる必要があつた。

カカシの足は、いつの間にかナルトを見つけたあの路地に向かつていた。何かわかるかもしない。そんな淡い期待が働いたのだろうか。記憶を頼りに向かつたその先、果たして無人だと思われたそこには、意外な人物がいた。

「ミナート先生」

四代目火影と刺繡された白い羽織姿の彼が、路地の隅に膝をついていた。驚きを込めて名前を呼ぶと、ミナートは緩慢な動作でこちらを振り向く。キラキラと水面の夕日のような金髪が揺れた。

「カカシくん、どうしたの」

「先生じゃ、どうしたんですか。ここに何か？」

「ん、ちょっとね。君は？」

僅かに眉を上げて口端を上げたその表情の動きに、自分には明かせない何かをしているのだと悟つた。一見してその心情は読めない。彼の柔軟な笑顔の裏に何が隠れているのか、興味がないと言つたらウソになるが、少しだけ低い位置にある彼の薄青い瞳を見詰めていても何も読み取れなかつた。里長ともなれば、感情のコントロール

すら自分の手の中なのだろう。さすがだ、と素直に感嘆した。上忍として、暗部として日々その実力を里に知らしめているカカシだが、ミナトと比べればその名声も精彩を欠く。若くして天才と呼ばれたことは共通していても、彼の輝きに自分は遠く及ばない。

気付けばミナトを探るようなことをしていた。そんなことをすれば、一発でばれてしまうことは彼の班にいたころから知っている。仕方なく、カカシは素直に質問に応えることにした。

「オレは、この間拾つた子供が倒れていたのがここなので、見に来ただけです」

「子供って……、ああ、前の任務のときに言つていたアレだね。警務部隊にはその子のこと言つた？」

「ええ、一応」

何を隠そう、ナルトの身元の確認を取つたのは警務部隊の面々だ。身元不明の子供と言うことで、今度取り調べに来るらしい。確かに誰かに暴行を受けた様子のナルトは重要な参考人だろうが、まだ小さい子供への対応としては少し大げさすぎる気もする。それを含めた非難も込めてミナトに言うと、彼の笑顔に微かに翳^{かげ}が走った。それは力カシでも読み取れるかどうかわからない微妙な変化。しかしその変化は一瞬で、すぐに彼の笑顔はいつも知るものに戻つた。

彼が表情を崩した。それが、カカシに妙な不安をもたらす。

「わかつた。フガクに言つておくよ」

「ありがとうございます・・・」

「それじゃあね、カカシくん」

瞬身で去つていいくミナトを見送つて、カカシは胸に残る妙な違和感を確かめるように息を吐く。

(「ひいう第六感的なものは信じない質なんだけどね）

言い知れぬ胸騒ぎが、カカシの中で渦巻いた。

*

ナルトは、カカシが出てつたあと「ロロンとベッド」に横になつて、彼の笑顔を思い出していた。

自分に優しくしてくれる大人は、三代目のジッチャンだけだとばかり思っていたのに。カカシと言う人は、里人皆に嫌われている自分にあんなに優しい。ぱつと胸の辺りがあつたかくなつた。これが嬉しいってことなのだと思う。

カカシが撫でてくれた頭を自分でも撫でてみる。当たり前だが自分の手は彼のよりも半分くらい小さくて、同じ感覚は得られなかつ

た。

また来てくれるかな。また撫でてくれるかな。手を振り払つてしまつたから、もしかしたらもうやつてくれないかな。

でも、カカシなら何となくやつてくれる気がする。

さつき別れたばかりの銀髪に、もう会いたくなつてきました。

今度は、いつ会えるだらう。

3（後書き）

ナルトとカカシが仲良し過ぎな気がしますが、ほのぼの要素がこの二人しかないので。すみません・ちなみにカカシはこの頃18歳くらいかと思われます。

カツカツツ カツカツカツツ

「ん・・・？」

鳩が窓のガラスを叩く音が耳覚ましたなんて、今日の耳覚めはあまりよくない。ミナトが身を起こし窓に視線をやると、見慣れた白い忍鳥がまだ窓ガラスを突いている。まだ夜明け前だというのに、どこからの伝令だろうか。

寝起きで固い筋肉を動かして立ち上がり、窓を開けて忍鳥を招き入れた。足に結えられた書類を広げて耳を通す。忍鳥は書類がミナトの手に渡つたのを確認すると、窓から再び飛び出して行った。

「・・・」

読み進めるにつれて、寝起きの霞かかっていた意識が覚醒していく。何度も文面を目で追い内容を頭に叩き込んでから、ぐしゃりとその書類を手の中で潰して風遁で粉々に裂いた。紙片は床にばらまこうと思ったが、後で掃除するクシナの渋面を思い浮かべゴミ箱に突っ込んだ。

クローゼットから出した忍服に着替えて、“四代目火影”と背中に刺しゅうされた羽織を着ると、その音に耳を覚ましたらしいクシナが布団から半身を上げたようだった。背後で動いた気配に、彼女の方を振り向く。

「もう仕事？」

眠そろに田を細めているクシナは、羽織姿のミナトを見てそり言つた。

「うふ。ちょっとね」

「わふ・・・」

落胆した様子のクシナに、ミナトは肩をすくめて見せる。

「なるべく早く帰るから」

「・・・大丈夫よ。ミナトは火影だからね、がんばって」

言いながら、クシナの手がミナトに伸びて、羽織の紐をきゅっと結んでくれた。昨夜ナルトのことを思い出して心細いだろうに、気丈に笑う妻が愛おしくて、感謝をこめて彼女の細い肩を抱き寄せ、「行つてくる」と小さく囁いて寝室から玄関へと向かう。

途中で通り過ぎた仏間に覗きこむと、昨日四匹に増えたカエルが笑っているように見えた。天国のナルトに届いていればいい。そう願い、仏間で一度だけナルトに向かつて手を合わせた。

「行つてくるよ、ナルト」

瞬身の術を使い火影室まで行くと、中は暗かつたがマント姿の小柄な暗部が立っていた。彼は今日、火影を警備する忍であったと記憶している。その横には特別上忍が一人、書類らしき何かを持つてそこにいた。

「詳しく聞かせて」

「は？」

忍が話す内容は、先ほどの伝令の内容とほぼ一緒だ。改めて突き付けられた事実に、眉をひそめて不快感を表す。

「侵入者だつて？」

「はい。侵入したのは昨日の夕方から夜の間だと思われますが、結界班は察知が遅れたようです。侵入されたことに気付いたのはつい先ほどで」

「どういふこと？」

「急に、進入路の形跡もなく侵入者は突然現れたそうです。察知が遅れたのは門外に張られた結界に引っ掛けながらなかつたからでしょう。時空間系統の忍術で侵入したと考えられます」

「時空間忍術ねえ。どうやったのかな」

ミナートは顎に手をやり、小さく疑問を呟いた。

木の葉隠れの里の結界は、侵入を察知するだけのものではない。忍術による外部からの干渉をある程度ではあるが防ぐことも考えら

れて作られており、その管理のために常に四・五人の術者がそれを最適の状態に保っている。時空間忍術ももちろん例外でなく、そんなもので侵入したとなれば結界に引っ掛けられないはずはない。むしろ結界を通り過ぎようとしたときに、忍術は解除されてしまうことが考えられる。結界班がぬかつたのか、もしくは木の葉には知られていかない新たな忍術か。

どちらにせよ、警戒を強める必要がある。

「で、その侵入者は捕獲したの？」

「いえ、まだ侵入者の正体がつかめていないのです。いま探知系の者を使って探させています」

「田星は付けている？」

「いや、それは……」

特別上忍は口ごもる様子を見せた。それは予測できた反応だ。恐らく、特殊な侵入方法で入ってきた相手である。幸い、今のところその侵入者は表立った行動を見せていない。今は、存在がわかつただけでも上々と考えた方がいいだろう。

ミナトはそう結論付けて、特別上忍に指示を出した。

「わかった。捜索班を編成して全力で侵入者を探して。人選は君に任せる。報告は迅速に。いいね」

「了解しました」

「人が頭を下げ、火影室から下がっていく。残った忍のもう一人は、ミナトに書類を渡してきた。

「時空間忍術の可能性が高いので、その道のエキスパートである火影様に意見をいただきたいです」

結界班の一人だった。

「ん。結界班ではどこまでわかった?」

「侵入者が突然現れた場所は大方判明しています。そこに異質なチヤクラの乱れがありました。ですが、その後の足取りは掴めていません」

彼の説明を聞きながら、手渡された書類に目を通す。里の大通りから見た裏通りの辺りに、赤い筆で印が付けられていた。そこが侵入者が出現したポイントらしい。

「この辺りの調査はどこまで進てるんだ」

「今後の伍班が進めております。明日には報告できるかと」

そう答えたのは暗部姿の忍だ。獸面に目を向けると、彼は小さく頭を下げる。

「ん、わかった。俺も行くよ。テンゾウ、ついて来て。君も」

「は」

「仰せのままに」

結界班の忍と暗部、テンゾウがそれぞれ反応したのを確認してから、火影室を出る。外に出て空を見上げると、既に夜が明けていた。暗い夜空から紫色の朝焼けとなつた空は美しい。

十月十一日の朝も、いつもと変わらず訪れた。

4 (後書き)

暗部の班名は作者の捏造なので、あしからず。また、原作の設定を
様々自己解釈して記述しております。全てが事実ではありません。

これからは活動報告で更新の報告をしてこようと思います。よろしく
ければチエックしてやってください。

要らぬ混乱を避けるために、侵入者の情報はごく限られたものにだけにしか知られなかつた。里の周りを固める忍たちにも、警備を厚くしろ、と言う事務的な命令だけが届けられた。相手の出方がわからない以上、里を無闇に色めき立たせるのは危険だという判断がされたからだ。三代目やダンゾウ、相談役の長老たちもそれに同意し、今日も里は平穏な様子を見せていく。

あの裏路地を調べた調査班の報告として、侵入者が現れた場所からその手掛かりとなるものは発見できなかつたらしい。人が多い表通りが近いため、忍犬の鼻も侵入者を特定できない上、忍が侵入したことを考えれば当然であるが、それらしき足跡も残つておらず、手掛かりとなつたのは僅かなチャクラの乱れだけだ。しかし、それすらもともすれば見逃してしまいそうになる僅かな残滓でしかなく、そこに“何かが現れた”と言つことの証明しかしてくれない。

岩礁に乗り上げた。そんな表現がぴつたりな状況に、ミナトは深いため息を吐いた。

数日経つても、手詰まりを見せていた状態に変化はなし。今も捜索班は動いてくれているが、当たがないために報告書はいつも白紙に近い。忍五大国最大の火の国が抱える木の葉隠れの里に侵入を許し、あまつさえ情報が盗まれるような事態にともなれば、里の信用はガタ落ちだ。里の住人全員の生活に影響が出ることになる。

早く何とかしなくては。その焦りを拳の中で握りつぶし、仕事の合間の気晴らしと称してミナトは例の裏路地に来ていた。自分は生憎感知系の能力は持ち合わせていないので、ここに来たところで何

がわかるというわけではない。精神安定の一環と言つたところか。

「」に“何”が現れたのか。膝をついて探るよつて地面を撫でる。手のひらに伝わる土の感触が腹立たしかつた。

そのとき、こちらに近づいてくる気配を感じた。よく知るその飄々とした気配に、その体勢のままこちらに来るのを待つ。

「ミナト先生？」

案の定掛けられた声は聞き覚えのある低い声だ。ゆっくりとそちらに振り向くと、カカシが呆然とそこにいた。まだ少年の域を出でいないがそれでも青年然としているカカシは、気付けばミナトより背が高くなっている。立ち上がって僅かに見上げた視線に、時の流れを感じた。

「カカシくん、どうしたの」

「先生」

驚いた様子を見せていたカカシだが、ミナトの笑顔に気が緩んだのかすぐにその表情は引っ込んだ。片目しか出でていない顔だが、その割には表情豊かだ。

「ん、ちょっとね。君は？」

カカシは暗部に所属しているが、それでもそうやすやすとこの案件を明かすことは躊躇われた。明らかにこまかしているようにしか聞こえない科白だった所為だろつ。カカシの視線がこちらを見透かそうと揺れる。表情の動きや視線の運び、心拍数や呼吸の回数に發

汗。探る要素は多いが、そんな隙を見せる気はない。それ以上踏み込むことをやめさせるために笑うと、カカシは我に帰った様子を見せた。ミナトの質問に応えた。

「オレは、この間拾つた子供が倒れていたのがここなので、見に来ただけです」

その言葉に、カカシが任務の報告のときにそんなことを言つて、いそいそと帰つたことがあったのを思い出した。珍しく帰還予定時間を超えて帰つてきたからよく覚えている。それに、あの日は十月十日だった。

「実はその子、身元が不明だつたんです。それで警務部隊の人たちが事情聴取するとか言い出して。まだ子供なのに」

不快感をあらわにして警務部隊への非難を言つカカシは、ミナトに警務部隊へそんなことをしないように進言してくれ、と言外に言つてゐるようだ。それを察したが、ミナトは耳に入つてきたあるワードに意識が行く。

“身元不明”、それに引っ掛かりを覚えた。不審に思つたのが一時顔に出たかもしれない。カカシが僅かに目を見開いたのを見た。

「わかつた。フガクには言つておくよ」

隙が出来た。笑つて取り繕つて、カカシの前から瞬身で姿を消す。

“身元不明の子供”が、“十月十日”にあそこで拾われた。今回の件と無関係とは思えないその事実に、ちらつと頭の隅が焼けるような感覚がした。その子供、どんなに歳や体が小さくても、忍である

ならば関係ない。事実、まだほんの6歳のときに中忍なつたカカシの例がある。

僅かに見いだせた解決の糸口に、頭がスパークするように今後のことを探り出した。

フガクと連携を取らなくては。そう考え、ミナトは里の中を駆け抜ける。

5 (後書き)

不穏になつてしまひました。・・・。

ナルトの怪我の経過は順調なようだ。骨折していた右手も、腕をそこまで動かさなければ指が使えるとわかつて、ナルトはあれ以来カカシや他の人の手に頼らず、自分で食事をしている。

と、主治医から聞いた。

またあれから少し間が空いて病院を訪れたカカシは、ナルトの主治医と会っていた。今は先日感じたナルトの違和感について調べてもらおうと、院内の廊下で主治医にその旨を説明している最中だ。三代目にはなかなかおいそれと会えないもので確認はとつていながら、あの「三代目の家の離れに住んでいる」発言は正直言つて信憑性ゼロである。あれが嘘だとしたら、子供特有の妄想か、それともこの前予想を立てた記憶の欠けか。どちらか分からぬ以上、カウンセリングを受けさせたまほしい、と言つことを主治医に相談していたのだった。

「わかりました、手配しておきましょ。もし記憶喪失ならば、治療を進めるうちにあの子の身元もわかるかもしだせんしね」

主治医はそう言つて了承してくれた。よかつたとホッとして「では」とナルトの所へ向かおうとするが、「ちょっといいですか」と軽く引きとめられた。

「はい?」

「はたけさんはお忙しいとは思いますが、なるべくナルトくんに会

いに来てもらえないか？ナルトくん、あなたが来なくてとても寂しそうでした」

「そ、そうですか？」

主治医に言われた言葉に、カカシは不謹慎にも喜んでしまった。ナルトは自分がいなくて寂しかったのか。そう思うと、あの子に好かれているのではと期待してしまった。実際嫌われてはいないと思う。まだあまり同じ時間を多くは共有していないが、これから増やしていくにひつて、ひそかに決意したカカシだった。

主治医と別れてナルトの病室に行くと、窓際のベッドでナルトは絵を描いていた。大きめの画用紙に、不自由そうにギプスで固められた右手を動かして絵を描いている。子供にわかるようにわざとらしく足音を軽く立ててベッドに近づくと、ナルトはこちらに気付いて顔を上げた。ぱっとその顔が明るくなつたのは、気のせいではないはずだ。

「カカシ！一ちゃん！」

カカシの名を呼びながら笑顔を作つたナルトに、カカシは目尻が下がる思いだ。こんなに嬉しそうに名前を読んでくれるなんて、嬉しいなはずがない。

「ナルト、久しぶり。『めんなー、しばらくなれなくて』

「んーん！だいじょーぶだつてばよ。病院の人、みんな優しいから

そういう言いながらニシシと笑うナルトは、前会つた時よりずいぶん明るくなつたようだ。どうやら看護師たちに人気者らしいと先ほど

主治医に聞いたが、その影響だろうか。

「絵描いてるんだね。何描いてるの？」

いつも通りベッドの横のパイプ椅子に腰掛けながら聞くと、ナルトは自慢げに画用紙を広げながら「四代目！」と誇らしげに言った。真ん中に書かれた黄色と肌色の何かは、四代目火影である波風ミナトであるようだ。子供の芸術センスは、カカシにはよくわからなかつたが。

「へえ、よく似てるなー」

「うつ言つておけば大丈夫かな、と打算的に言葉を紡ぐ。そんな大人の内情など分かるはずもないナルトは褒められて御満悦だ。

「四代目が好きなの？」

「うん！大好きだつてばよ！だつてさだつてさ、四代目火影つてすつごいエイコウなんだろ？」

その言葉に第三次忍界大戦でのミナトの活躍を思い出して、カカシは頷く。あの人気が戦場に現れるだけで味方の士気は自然に上がった。木の葉の黄色い閃光という異名を戴く彼にかかるべ、どんな不利な戦況もひっくり返る。一人で千人分の働きをしたと言つても過言でない彼の活躍は、英雄と呼ぶにふさわしい。

「前キュウビつていう妖怪を退治したのも四代目だろ？」

「……ん？」

キュウビ？九尾？

カカシの脳裏にミナトの奥方であるクシナの明るい顔が浮かんだ。彼女は九尾の人柱力だが、封印したのはミナトではない。クシナに九尾がいたと、ミナトはまだ忍にもなつていなかつたはずだ。

まだだ。ナルトの妙な発言。事実と食い違う内容に、カカシは首を傾げる。

「九尾を封印したのは四代目じゃなかつたと思つけど」

訂正の意味を込めて言つと、ナルトは「えー」と驚きの声を上げた。

「だつて、三代目のジッチャンが、四代目は命を張つて里を守つたつて言つてたつてばよ？」

三代目ジッチャン情報か。ナルトの中の世界が少しばかり繋がつたが、わかつたことに対し、分からぬことの方がはるかに多い。カカシは、少しだけ話を呑ませてみることにした。

「火影様だからね、里を守つてくれるよ」

「なー！かつこいいつてばよ！オレも一回呑つてみたかつたなー」

「ふーん、それじゃあ今度、会えるかどうか聞いてあげるね。実は四代目はオレの先生なんだ」

会話の流れで出た何気ない提案に、今度はナルトがカカシに向か

つて首を傾げた。

「でも、四代目って死んでるんじゃないの？」

「は？」

あまりに素つ 賴狂な発言に、素つ 賴狂な声で反応してしまった。忍らしくないと反省したが、すぐに思考はナルトの発言の考察へと移行する。四代目は死んでいる？そんなはずはない。ミナートは今までピンピンしている。この間も会話を交わしたばかりだ。なぜナルトの中でミナートは死んだことになつてしているのか。

（やつぱり記憶に向か問題でもあるのかなー。ここまでくると妄想とは思えないし）

「ここまで一貫して食いついているとなると、子供の想像の範疇を超えているのではないだろうか。そうなるとやはり怪我をした際に、記憶になんらかの欠陥や事実との齟齬ズレが発生するような打撃を受けたのか。はたまたそう言つ記憶障害か。

考えるだけでは分からぬ。腑に落ちない点は多いが、ナルトと話していること 자체は楽しいのだから素直に楽しんで置こうと半ば諦めにも似た心境で、カカシは「そうだねー」と適当な相槌を打つた。ナルトの中では相変わらず四代目が死んだままだが、そろそろ訂正するのが面倒になつてきていた。

「そういえば、お前って歳いくつなの？」

もつと早く聞かなければいけなかつた氣もするが、今更思いついて聞いてみた。ナルトは一瞬考えて、左手で指折り数え始める。その必死な様子は微笑ましく、気が付けばカカシはまた笑つていた。血生臭い暗部の任務ばかりで荒んでいた気持ちが、ふわりと広がつて温かくなるようだ。こんな穏やかな時間が自分の手にあるなんてにわかには信じられないが、ふわふわと揺れるナルトの金髪を見ていると、少しづつ実感が湧いてくる。自分の中に広がるその想いが、段々と大切なものになつてきていた。

ナルトはやがてカレンダーに手をやつた後、自信満々に「四つ！」と指を四本立てた。

「このまえ四歳になつた！」

「この前？この前つてこいつ？」

「んつとねんつとね、十月じゅうにさー！」

十月“とおか”だと内心で突つ込みながら、カレンダーの十月十日に手をやる。その日は、確かにナルトを拾つた日だ。あの日が誕生日だったのか。災難な誕生日だ。それが不憫に思えて、カカシはあることを思いついた。

「遅れちゃつたけど、誕生日のお祝いやうつか

「おいわい？」

「そう。ケーキとか、プレゼントとか用意して、一緒にお祝いしよう

「う？」

「……」

ナルトが黙り込んだ。青い瞳がきゅっと影を落としたのを見て、何かまずいことを言つてしまつただろうかと自分の発言を振り返つた。特に問題があるようには思えない。焦つて「どうしたの？」と聞くと、ナルトは小さく首を振つた。

「本当に、おいわいしてくれるの？」

「うん、するよ？ ナルトは嫌？ 嫌なら、」

「うん、ううん…嬉しいってばっ」

今度は大きく首を振つて力カシの言葉をさえぎると、ナルトは泣き笑いのような複雑な表情を作つた。四歳の子供が作る顔にしては複雑な色が多過ぎる感情が読み取れて、胸に小さな痛みを覚える。

「オレさ、たんじょうびつていわつてもらつたことないから、嬉しこつてばよ！」

「ナルト……」

そう言えば両親がいないと言つていた。そうなれば、親の愛情を十分に受けずに育つたのかもしれない。代わりに愛してくれる人も事欠いていたのかもしれない。そう言えば、ナルトは自分の歳を四歳と言つたが、それにしては発育が良いようには見えない。力カシは言動がしっかりしている分、その小さな体に疑問を持つていた。今は包帯に隠されている、痩せた細い手足や四歳にしては小さな体。

前訪れた時に病室から窓の外を眺めていたその顔は、大人びていたのではない。ただ、何もなかつたのだ。

カカシは小さく決意を固めた。

「どびきりのお祝いをしよう。明日でいいね？」

「うん！ 楽しみだつてばよー」

太陽みたいに笑うこの子を、守りたいと思った。

6・5 幕間（前書き）

少しだけ昔の話。幕間にになります。

午後を告げる鐘が、莊厳な響きを里に撒き散らしていた。ふと見上げた青い空は、秋のらしくスッと高く、雲ひとつ見当たらない。夏から数えてもう一月ほど、弱まつた太陽の光が、その空の中で唯一の役者だった。

カカシは空から視線を移し、目の前にある小さな家屋を見上げた。決して大きくななく、こぢんまりとしているが、その佇まいにカカシは父と過ごしたかつての我が家を思い出した。そんな、懐かしい雰囲気がある。ここは火影に就任してまだ幾年も数えていない四代目、波風ミナトが、これからを家族とともに過ごしていく家だ。

その家族の訃報を聞いたのは、つい昨夜のことだった。ミナトが私信用に飼っている小鳥が伝えてきたそれに、居ても立ってもいられずここに足が向いた。自分に何が出来るとも思えなかつたが、とにかく何かしなければと思つた。

「カカシくん、來てたの？」

力ない声に振り向けば、買い物袋を下げた四代目火影、波風ミナトが門のところに立つていた。忍服と微妙に形の違う真っ黒な服に身を包んでいる。見覚えがあるそれは、かつて自分も着たことがある喪服だ。その姿に、あの伝令が事実なのだと言われている気がした。どこかで、信じていない自分がいたのかもしれない。ふくらんにお腹を幸せそうに撫でていた彼の奥方のことを思い出すと、まさかそんなことになつたなんて想像できなかつた。

彼の中にいるように促されて、カカシはそれに従い中に入る。家中は妙にガランとして、静かだつた。前来た時も決してにぎやかではなかつたけれど、こんな風に底冷えするような空気が滞つていただろうか。家主の不幸に、家も落ち込んでいるのかかもしれない。

カカシがらしくないことを考えながらミナトに着いて居間に行くと、部屋の隅にベビー用品が積んであるのを見つける。中には先日、自來也からもらつたのだと嬉々として語つていた大きなベビーベッドもあつた。

「捨てるんだ」

「え？」

カカシがそれを見ていることに気付いたのだ。ミナトを振り返ると、見たことないような顔で彼は笑つていた。

「クシナが帰つてくる前に、全部捨てる」

「でも」

「毎日。泣いているんだ」

「…………」

「これ以上、苦しめたくない」

「この人は、こんなに歳を取つたような顔をしていたかな、と唐突に思った。

買い物袋を台所に置いたミナトは、その動きの流れでお湯を沸かし始めた。師の見たことのない憔悴ぶりに、掛ける言葉が思いつかない。

なぜ自分はここに来たのだろう。カカシは、自分の浅はかさを呪つた。忍としていくら優秀でも、まだ成人もしていないヒヨックに何が出来る。自分も親を失っている。家族を失った苦しみなら理解しているつもりだったが、理解したところで自分が大人になつた訳ではないのだ。

たとえばミナトの師である自来也ならば何と言つだらう。綱手なら、三代目なら、何と言つだらう。考えても考えても、カカシの頭にふわわしいと思える言葉は浮かんでこなかつた。

「座つたら？」

「ひらりを振りかえらず、ミナトが言つた。それは命令だ。長い間彼の部下として、弟子として過ごしたからこそわかるその言葉の響きに、カカシは素直に従うしかない。居間にある椅子にそつと腰掛ける。椅子が板の間をする鈍い音が、嫌に家の中にこだました。

少しして、ミナトがお茶を持ってきた。「いただきます」と小さく言って口に含んだお茶は、舌がしびれるほどに熱かつた。

「うわ、熱いっ」

そう言つたのはミナトだ。カカシの向かい側に座つてからお茶を飲んで、その熱さにやられたらしい。

「「めんね。お茶なんて普段あまり淹れないから」

そうであつても、ミナトにしては珍しい失敗だつた。苦笑するミナトに、カカシは曖昧に「いえ」と答える。

何か詰つべきだと思つのに、口は石膏で固められたようにうすく動いてくれなかつた。それでも、何とか考え出した言葉を紡ぎうと、重い口を開く。

「……先生あの、」

「 もう、産んじゃいけないんだって」

唐突に言われた科白に、言おつとしていた言葉がカカシの頭から抜け落ちる。ミナトは薄く笑つたまま、今日の空の色のこと話をみたいに気軽な口調で続けた。

「九尾のチャクラを、これ以上危険を冒して外に放出するよくなことはできないつてさ」

「何でもない」とのよひに、ミナトは淡々と語つている。

「俺が出来なければ、他の人間には出来ないだろ? って
ドクンと、耳の後ろ心臓があるみたいに鼓動が跳ねた音が聞こえた。

「だから、もう諦めやつてわ」

そこで大きく息をついて、ミナトは少しだけ冷めたお茶に口をつけた。そして右方向にある窓に視線を移す。

「なんでかなあ」

「先生……」

「なんで、かなあ」

ミナトが、泣いているんじゃないかと思つたけれど、その双眸は乾いていた。その代わり、瞳の色がいつもの綺麗な青に見えない。汚泥に青い絵の具を混ぜたみたいな、精彩を欠いた色が、何を見るでもなく窓の方向を見つめていた。

「ごめん。こんな話して」

何も言えずにいると、ミナトが突然手を打つてそう言った。途端に彼の表情は明るくなる。いつものミナトだった。

「力カシ、来てくれてありがと」

「すみません、オレ、何も出来なくて」

「……ありがとう。そう言ってくれて」

だから泣かないで、と掛けられた言葉に、はじめて自分が泣いていることに気付いた。

その後、クシナが退院したのち、ミナトたちは夫婦二人きりでさやかな葬儀を行つたと聞いた。それから数日を数える頃にはミナトは火影として普通に働き始め、道端ですれ違つたクシナは明るい様子だつた。

じつして日常が戻つていく。そのうちカカシも、師の子供が死んだことをあまり思い出さなくなつていた。子供の名前を聞かなかつたことも、忘れていた。

6・5 幕間（後書き）

補足的な話。カカシは死んだナルトをよく知らなかつたんです。死産の子どもは普通親族以外を呼ぶようなお葬式もしないですから、遺体と対面もしませんでした。

この場面、もともとはプロットを立てた時点ではない話でしたが、カカシがナルトのことを知らないってのが自分の中でどうにも納得できない部分でして、急遽付け加えました。

「うずまきナルト。」

その名がうちはフガクの口から伝えられたとき、ミナトは何かの冗談ではないかと疑つた。しかし、資料にも確かに黒い墨で書かれている名前は“うずまきナルト”で間違いなかつた。

警務部隊は予定通り身元不明の子供に、彼が入院している病院で事情聴取を行つたそうだ。ただ子供の見た目が予想外に幼かつたのもあり、尋問班が用いるような手段や写輪眼を使用した聴取ではなく、あくまで小さな子供に何があつたのかを聞く程度に納めたらし。その際に交わされた内容が書かれた書類が、今ミナトの手の中にある。

「……はは」

おちよくなつてゐるのだろうか。怒りとも悔しさとも分からぬ感情が筋繊維を駆け廻り、その余波で手の中の書類がぐしゃりと歪んだ。報告に來ていたフガクが怪訝そうに声を掛けてきたようだが、耳には届かなかつた。彼の存在すら一瞬忘れるほどの激情。自分でも珍しいと思える感情の高まりに飲み込まれそうになり、唇を噛むことでそれを何とか抑えた。加減をする余裕がなく、犬歯が食い込んだ唇は大げさに切れて口端から血が垂れる。

「火影様！？」

暗部の男が異常を察したらしく荒い声を上げた。切れた唇から感

じたのはほんの僅かな痛みだったがそれでもミナトを冷静にしてくれて、こちらへ寄ろうとしていた暗部を手で制す。血を手の甲で拭つてから、何も言わず立つフガクに田を向けた。

「この子供、忍か?」

声が硬い。駄目だ、落ち着け。

「……一見しただけですが、その可能性は低いでしょう。普通の子供でした。ですが、術式の類を仕込ませていて可能性もあるので、注意するに越したことはないかと」

フガクは淡々と必要事項だけ、書類の文面通りに報告していく。

普通の子供?そんなはずがない。普通の子供が、“うずまきナルト”なんて名乗るものか。

「うずまきはクシナの旧姓だ。ナルトと言ひ名は、ミナトたちの間にできた最愛の息子と同じ。しかし、生まれた直後に天国に行ってしまった、生きてこの腕に抱くことが出来なかつた息子。

この“うずまきナルト”は、息子と年齢まで同じと来ている。ここまで質が悪い侵入者は初めてだ。“あちら”は現火影のことを調べ上げ、どんなことにこちらが動搖するのか分かり切つているように思えた。歴代屈指の火影と呼ばれたミナトが、どうすれば陥落するのか、あちらは考えたはずだが。

その策が、これか。

「……俺が直接会いに行く」

それは、自分でも初めて聞くような低い声だった。フガクは瞠目したが、何も言わず「仰せのままに」と深く敬礼した。

暗部の護衛もフガクの付添いも断つて、一人で病院への道を歩く。瞬身で行くことも考えなかつたわけがないが、高ぶつた感情をそのままに子供に会つのは躊躇われた。少し、時間が欲しい。

冷静にならなくては。震える拳を握りこみ、漏れ出そうになる殺氣にも近い自分自身を閉じ込めようと息を整えた。しかし吐く度に漏れ出る熱いものが、自分を落ち着かせてくれるとは到底思えない。

らしくない。落ち着け、落ち着くんだ。あの子供に会つのだ。隙を見せるな。

里のトップとは思えない火影の葛藤に、自嘲の笑みがこぼれた。

(そうだ、俺は火影だ。これくらいで、動搖するな)

ぎゅっと一度、目をつぶつて視界を改める。少しだけ先ほどより気分が良くなつたようだつた。周りを気にする余裕が出てきて、深く息を吐いて呼吸も平生に戻す。そうすることで心なしか開けた視界に、見慣れた銀髪を見つけた。正直声を掛ける気にはならなかつたが、彼は“うずまきナルト”と深くかかわつてゐる。なにか探りを入れるのもいいだろう。

「カカシ！」

できるだけいつも通りの笑顔を意識してカカシへ声を掛けると、「ミナト先生」とカカシは小さく言つてこちらを向いた。その片手には白い紙箱と、プレゼントのようなリボンと色紙で包装されたものを持っている。いつかの自分の帰宅途中の姿を思い出して、誰かいい人との記念日なのかと邪推した。

「恋人にでも会いに行くの、それ」

「はは、ちがいますよ。今から病院です」

「病院つて……」

あの子供か。

「実はあいつ、オレが拾つた田が誕生日だつたらしくて。今日遅ればせながらお祝いをしようつてことになりますね」

「拾つた田つて、十月十日？」

「はい。四歳になつたんですって」

嬉しそうに語るカカシとは対照的に、ミナトの中ではどろりと溶けるような、しかし冷たくて黒いなかが溢れ出していた。十月十日に四歳。その情報に、一度は鎮まつた様子を見せた激情が、再度ミナトの脳を焼くように熱を持ちだす。

ふざけている。

「そう言えば、ナルト　　あ、その子の名前なんんですけど、ナルト、四代目のことが好きらしいんですよ。昨日会った時に四代目の絵を描いていました。よかつたら、今度会ってやってくれませんか？きっと喜びます」

カカシは無邪気だつた。子供を喜ばせようと一生懸命なただの人だ。それはミナトがかつて憧れ、なるうとしてなれなかつたもの。ナルトが生きていたならば、彼の誕生日にはいつもより早くケーキとプレゼントを持つて二人が待つ家に帰つて、息子の嬉しそうな顔を見ることが生きがいの、そんな存在。もう、一生なれはしない。そう思つと、ごぱりと、自分の中で何かが溢れた。

「……今から俺も病院に行くところだつたんだ。よければ付き合つよ」

「本当ですか？ありがとうございます」

にこりと笑うと、自分を微塵も疑つてもいらないカカシは返事をするように笑つた。

病院の薬品の匂いはいつまで経つても慣れない。久しぶりに訪れた木の葉の病院は、前訪れた時となんら変わっていなかつた。久しぶり、と思って、しばらく怪我や病気をしていないんだなあと感慨にふける。忍界大戦終結後は、木の葉はずいぶん平和になつた。この頃は、火影である自分がやることは戦略等の指揮ではなく、木の

葉の内政関係の事務処理だ。ミナトたち世代が親となつた今、その子供たちは戦争の“せ”の字も知らないで育つてくれている。それが嬉しく感じると同時に、フガクのところのちびすけが日々ほのぼのと成長していく様を見て、せつない気持ちになつたことを思い出した。あれはナルトと同い年だ。フガクの妻のミコトとクシナはとても仲がいいし、もしかしたらナルトといい友達になれたのかもしない。

カカシは慣れた様子で病院内の廊下を進み、割と奥まつたところにある病室を指差した。ここにその子供がいると言つ。

病室の入り口に手書きで書かれた“うずまきナルト”的プレートが目に入る。いつの間にか乾いていた口の中に気付いて、緊張している自分に驚いた。

(忌々しい)

先ほど噛み切つた唇を舐めて、血の不快な味を口の中に広げた。意味のない行動だったが、とにかく自分を落ち着けるために何かしたかった。

「ナルト、来たぞー」

がらりと病室の扉を開けながら、カカシが中にいる子供に声を掛ける。それに応えて、子供特有の高い声が返ってきた。

「カカシにーちゃん！ いらっしゃいだつてばよー！」

「おーー丁前な挨拶だ。誰に教わった？」

「んつとねー、看護婦のおばさん

「へえ、そりやよかつたなー。いいこと教わったぞ」

力カシに続いて病室に入る。彼はベッドの周りを囲んでいるカーテンをめぐりながら子供と会話していたが、同時にミナトを迎えるように身体を避ける。それに応えてカーテンの中に入ると、病院の白いベッドの上に、小さな体がちょこんと乗っていた。

金色の髪の毛に、青い瞳の子供。細い体や青つ^{あざ}白い身体に巻かれた包帯やカーゼが痛々しく見えた。子供は、いきなり現れたミナトをまじまじと見つめている。警戒されているのか、それとも単なる興味か。

金髪も予想できだし、青い目も予想できた。もしかしたらクシナのような赤い髪かもとも思ったが、火影が目的ならば自分と姿を合わせてくるだろうと思つていた。それだけなら、よかつた。

「…………」

子供の両頬にある細い二本の痣。まるで動物の髭のようなそれは、確かにミナトの記憶にある。小さな棺桶で眠つていたわが子の顔にも、同じ痣があつた。

(どうこうことだ。そこまで漏れていたと言つことか)

しかし、それはどうにも考え難い。ナルトの葬儀は行われなかつたし、遺体はすぐに火葬された。火影の子供が死産だつたことは、実は里にはあまり大っぴらには知られていない事実だ。あまり触れまわつてはクシナの心を抉る結果になるかもしないと、公表しな

かつた。そのため、ナルトの外見的特徴を知り得たのはごく少数の人間だけで、全てが木の葉でもミナートの信頼を得ている者たちばかりである。そこから裏切り者が出了ことは考えたくないし、何より裏切ったとして、我が子が生き返ったような“演出”に果たして利点はあるのか。

(いや……、俺は十分動搖させられてる)

自嘲するよつよ口端を上げて、ミナートは深く、細く息を吐いた。

今もそうだ。ミナートは、早鐘を打つ自分の鼓動を押さえられなかつた。目の前の子供が、果たして忍の気配を少しでも匂わせていたら、そうではなかったのかもしれない。自分でも処理しきれないそれを、きつく拳を握りこんで抑えた。

なんだ、なんなんだ。

何でお前がここにいるんだ、ナルト

ミナートは日に映るその子供を、なぜだか最愛の息子だとしか思えなかつた。

7（後書き）

原作で、生まれた直後のナルトにはもう髭の痣があつたので、九尾が入っていないこちらのナルト（死んだ方です）にも痣がある設定を付けました。

お気に入り登録数50件突破！ありがとうございます！！

「ナルト、自己紹介して。四代目火影様だ」

「四代目……？」

カカシの言葉に、子供が不思議そうに首を傾げる。その視線は相変わらずミナトに注がれたままだ。まるで信じられないものでも見たかのような反応である。信じたくないのはこちらだといつて。たゞいつていうのはこちらだといつて。

「四代目は死んだんじゃねーの？」

「またお前はそんな……。すみません、ミナト先生。」いつ、記憶に混乱があるみたいで

記憶に混乱、と聞いて演技かと思ったが、すぐにそれを振り払う。振り払つてから、演技かもしれない、と思考が返つてくる。混乱していた。子供を疑わなくてはいけないと思つてゐる自分と、この子供がナルトであると、どうしてかどこか期待してしまつてゐる自分がいる。

期待なんてする必要はない。ナルトは確かに死んだのだから、ここにいる子供がどれだけ我が子と似ていようが、その気配がナルトと近似していようが、ナルトではないのだ。

「…………んー、つまみきナルトだってばよー…ようじくおねがいします！」

子供は納得している様子はなかつたが、カカシに促されるままに

自己紹介をした。ニッと笑った顔になぜか泣きそうになる。子供の声で直接伝えられたナルトの名前を、特別な響きなんてなにもないのに、思わず何度も頭の中で繰り返してしまった。繰り返したところで、どうなるわけでもないのは分かり切っているというのに。冷静さが戻つてこない頭のまま、声の震えを意識しないように口を開いた。

「……波風ミナト、四代目火影だ」

その声は妙に低くて、自分にしては嫌に無愛想な言葉だった。もつと愛想良くふるまうつもりだったが、それが限界だった。

子供は相変わらず不思議そうにじあらを見上げている。ふと、子供の後方、壁に貼られた絵に目が行つた。そういうば力カシが、ミナトの絵を子供が描いていと言つていた。それの一枚だろうか。肌色と金色の人らしき大きなものと、それを小さくしたようなものが並んで立つている絵が飾られていた。

それがまるで、親子のように見えた。

「……っ」

黙目だ、黙目だ黙目だ。

田頭が熱くなつたのを感じて、自分の中に溢れた考えを振り払つ。

惑わされるな。この子供は違つ。

違う

。

「ミナート先生？」

気付けば片手で顔を覆った格好で固まっていた。カカシの訝しげな声に顔を上げる。

「どうしました、お体の具合でも優れないんですか？」

「いや……」

軽く首を振つて、もう一度子供を見た。相変わらずこちらを見つめている田は青い。空のそれより青く、海のそれより澄んでいる青が、こちらを見つめていた。息子は、ナルトの目はこんな色だったのだろうか。目の色も確認することが出来なかつた小さな命を思い出して、また唇を噛んだ。痛みなど感じなかつた。ただ、血の不快な味が口の中を侵食するばかりだ。

これ以上、ここに居ればボロが出る。そのボロが何なのか自分自身でもわからなかつたが、ここにはいられない。ミナートは早々に立ち去ることにした。その前にと、カカシに向かつて小さく声をかける。

「カカシ、今夜火影室において。大事な話がある」

「…はい。了解しました」

唐突な命令にカカシは一瞬当惑した様子で幾度か瞬きしたが、それでもすぐ何かを察して低い声で答えたのは彼らしい。

「それじゃあ、失礼するよ」

「はい…。ナルト、四代目様がお帰りになるそつだよ。さよなら言つて」

そう言つ力カシは、いつの間にかずいぶん保護者然としている。それをよくもわからず不快に感じたのはなぜか。考えて、それが嫉妬に似ていると気付いてミナトは笑つた。滑稽な感情だ。侵入者の可能性がある子供に対し抱く感情としては、論外のものだつた。

「えつと、バイバイだつてばよ?」

言われるままに手を振つた子供に、ミナトはどんな顔を向けたのだろう。自分でもわからない。だけれど、ミナトが子供を見た瞬間、彼の顔が強張つたのを見た。途端、振つていた手を下ろして子供は俯ぐ。ミナトの方を向いていた力カシはそれに気づかず、「ありがとうございました」と頭を下げている。

「いや、じゃあ夜に」

「はい」

言い残して、二人にさつさと背中を向けて足早に病室から出た。病院を出た所で瞬身を使い、人気のない里の外れの演習場まで来て、足を止める。氣を落ち着けなければと思つて、眉間に揉んでみた。ため息をついてみた。頬をひっぱたいてみた。

「……ナルト」

息子の名前を呟いてみた。先ほどの子供の顔が浮かんでくる。何度も振り払つても浮かんできたその姿が、ミナトの苦悩を誘つ。

あの子供は何者なのだろう。フガクの報告の通り、忍には見えなかつた。だが、だとしたらあの子供は何だ？ナルトが順調に育つならばきっとあんな姿をしていただろう。その姿をして、ナルトという名を名乗つて、一体どんな目的があるのか。誰かの差し金か。もしかしてあの子供はなにも知らなくとも、何か秘密を握つているのか。

疑問は尽きなかつた。その間にも頭には、先ほどの子供の顔が浮かんでくる。あの子は、最後に顔をこわばらせて俯いた。そんな顔をするなど、言ってやりたかつた。だが、ミナトの理性がそれを許さない。あれは十中八九侵入者の正体だろう。だつたら、今すぐにでも拘束して里の監視下に置かなくてはいけない。上層部の過激派ならば処分することも考へるだろ。ミナトだつて、実行に移さなくともそれを視野に入れてあの子供に対する対応をしなくてはいけない。そうしなくてはいけないのに、ミナトはあの子供にそんなことをできるとは、到底思えなかつた。

あの子供に、他の反逆者と同じように手を下すことは出来ない。それは、どう考へてもミナト個人としての感情が邪魔をしている所為だ。そんなもの殺してしまえと念じても、人間である自分が感情を殺しきることは不可能に思えた。あの子供以外ならばいざ知らず、アレに対して、冷静でいられる気がしない。

消えてくれない子供の顔を、もう一度確かめるように思い浮かべた。金色の髪も、頬の妙な痣も、死んだはずの我が子と一緒にだ。

「……ナルト、か……？」

呟いてみて、何とおかしな妄想だろと自嘲した。そんなはずない。あの子は確かに死んだ。この手で冷たくなつた身体を確認した。

だから、その可能性はゼロだ。先ほども似たよいつなことを考えて、否定したばかりじゃないか。

(俺は馬鹿者だな……)

ミナトは消えてくれない子供の顔を無理やりかき消すよいつこ、固く両をつぶつて頭を抱えた。

8 (後書き)

最後をちょいとだけ直しました。 (11・8・1 13時)

10日ほど更新が難しくなりました。詳しくは活動報告で。

四代目火影と名乗る男が去つていった方を見ながら、ナルトはぎゅっと膝を抱き締めた。久しぶりの感覚は、懐かしい痛みを伴つて胸を潰す。忘れていたはずのそれは、少し前、本当にほんの少し前までは常に感じていたことだ。

あの男が自分に向けていたのは、憎悪だった。ナルトは人の感情に敏感な子供に育つていたから、感じ取つたことに間違はないはずだ。

ここで触れ合う人々が皆優しいから忘れていた。自分は、里人に嫌われているという事実を。

「ナルト」

とんと、頭に重いものが乗つた。カカシの手だ。温かなぬくもりを持つたそれは、何度もナルトの頭を往復する。その度に、強張つていた身体が解けて行くような気がした。

「どうした？」

カカシの声がいつもより優しく耳に届く。見上げた銀髪は、螢光灯に透けて光つていた。

「今日はケーキ買つてきたぞ。医者も食べていってさ。あと、これね」

カカシは口を開かないナルトに気にした様子もなく笑いながら、持つてきたものを自慢げに披露した。白い紙箱と、包装紙に包まれ

た何か。白い紙箱はナルトだって見覚えがある。ケーキの箱だ。もう一つは、何だろう？

「プレゼントだよ。開けてみて」

カカシが視線で開けるように促してきたので、ビリビリと包装紙を破いて開けてみた。中から現れたのは、犬なのだろうか、変な顔のキャラクターの帽子だ。妙に挑戦的な顔をした丸鼻のキャラクターが、こっちを睨んでいる。こげ茶色のそれを被つてみたら、ナルトの頭には少し大きかった。

「ありやあ、サイズ間違えたか」

失敗失敗、と悪びれた様子もなく、むしろ楽しそうに笑うカカシに、ナルトも楽しくなってニーチと笑った。そうすれば、さつき感じた嫌な感覚が溶けて消えて行くような気がした。

「それ、ナイトキャップつていつりじいよ。寝るときに被るんだって」

「ないときゅつぶ？」

「要するにパジャマだよ」

パジャマにも帽子があるのか、と軽いカルチャーショックを受けれる。でも、今日からはこれを被つて寝ようと大きめの帽子を撫でる。

「ありがとうござ、カカシ二ちゃん」

「うん、どういたしまして」

*

日が暮れ、夜の帳が降りた頃。カカシがミナトの命令通り火影室に向かうと、彼はいつも通り机に座つて手を組んでいた。少しだけ違うのは、今日は書類に向かっていないところか。ノック一つで入ってきたカカシを見止めるか、ミナトはゆっくりと立ち上がった。

「御苦労さま。夜遅くに悪いね」

「いえ」

ミナトの様子が変だ、と一目で思った。そう思えること自体珍しい、というかあり得ないことだ。彼の様子が変だったのは四年ほど前、生まれたばかりの赤ん坊が死んだ時くらいだった。それ以外のミナトは常に冷静で、どんなことに対しても自分の感情を殺し最善の策を練り上げる、火影として理想的な人物である。その彼が、一体何に対する様子をおかしくしているのか。

ミナトは机を回つてカカシの前まで来ると、一枚の書類をこちらに示した。反射的に受け取つたそれは、警務部隊が、カカシが不在の間に行つたというナルトの事情聴取の報告書だ。これがミナトの

手元にあることは特に不思議なことではない。里のトップの火影に 対して、これくらいの情報はすぐに開示されるだろ。しかし、なぜこれを今手渡されるのか。

「つづまきナルトは、……里の監視下に、置く」

ミナトが小さく呟つた科白に、一瞬反応出来なかつた。

「何で、ですか？」

すぐに理由を問うことことが出来た自分を褒めてやりたい。それくらい、ミナトの科白に驚いたのだ。

カカシの問いに、ミナトは苦しげに眉を顰めて答えた。

「十月十日の夜に、里に何者かが侵入した」

初めて耳にする情報だったが、一介の忍でしかない自分に与えられる情報が限定されていることは今更驚くことではない。カカシは、ミナトの言葉に耳を傾けることに集中した。

「あの子は、十月十日に拾つたと言つていただろ？君があの子供を見つけた場所と、侵入者が出現した場所が一致した」

「……ナルトが、この里を狙つている一派の手の者だとでもいいたいんですか？」

「否定は、できない」

そう言つてこるミナト自身、ナルトを疑つてゐるよつには見えな

い。半信半疑、と言つたところだろうか。カカシの目から見てナルトはただの子供だ。ミナト自身、ナルトに会つてみてそう思つたはずである。そのため状況証拠が揃つても、その疑いに陰りが出てきたのだろう。

「ナルトはただの子供ですよ」

カカシは念を押すように言つた。ミナトはさうに眉間にしわを寄ると、大きく息を吐きながら腕を組む。

「そうは言つてもな……」

「何か気になることでも?」

「……いや。とにかく、うずまきナルトには監視をつける。お前がやれ、カカシ」

「ここに呼ばれた理由はそこか、と念点がいく。しかし、正直願い下げだ。

「オレに、ナルトに不審な様子がないか見ていようと?」

「ああ。お前がやるのが、一番都合がいい。もし拒否するなら暗部をつけろ」

「……脅し、ですか」

「好きに受け取れ」

途端にミナトの火影としての冷徹さが表に出てくる。逆らつ」と

など抑えなくなつてしまつよつな、強制的な声音だった。

ナルトが暗部に監視されるなんて、虫唾が走る。だつたらカカシ自らが監視した方が幾らかマシといつものだ。ミナトの脅しにまんまと乗る形になつてしまつが、仕方がない。

「了解しました」

今は、腰を折つておいた方が得策だろつ。

9 (後書き)

しばらく更新できなくてすみませんでした。また一週間ほど更新が難しい状況が続いています。もう少々お待ちください。

おかしい、と波風クシナ、旧姓うずまきクシナは、目の前でクシナ手製のナスのぬか漬けをかじる夫、ミナトの顔を凝視しながら思つた。自分もぬか漬けをかじつて、「今年もうまく出来た」と舌鼓を打ちたいところだが、それどころではない。どうも夫の様子がおかしいのだ。見るからに元気がないと言うが、ほんやりしていると言つうか。今も呆けているのか、何回噛んでいるの、と突っ込みたくなるくらい一口が長い。こんな妙な様子のミナトを、クシナは見えたことがなかつた。

変な言い方になるが、おかしく見えることがおかしいのだ。クシナの夫は火の国は木の葉隠れの里のトップ、火影だ。感情を隠すのが誰よりつまい。

どうやら自分を殺すのが癖であるらしく、妻である自分の前でもそれはあまり変わらない。ナルトが死んだときでさえ、クシナに気を遣つてか極力いつも通りに振舞つていた様子だった。里の多くの機密を抱える身としてそれは当然であるだろうが、クシナはもう少し気を緩めてもいいと思っている。直接苦言を呈したこともあったけれど、ミナトも無意識らしく首を傾げられた始末だ。

そのミナトが明らかに様子がおかしいなんて、おかしい。これは相当のことがあつたに違いない。何があつたのかと予想してみたが、もともと頭で考えるよりはまず行動に移すタイプだ。クシナは早々に白旗を上げて、直接聞いてみることにした。

「ミナト、あなた何かあつたの？」

单刀直入な質問に、ミナトは驚いた風に皿を見張つて「え？」と短音を発した。これも彼らしくない。

「何があつたように見えるかな？」「

困ったように笑うミナトに、クシナは苦笑を返した。

「見るからに」

「わつか……。」めん、氣をつけろ

そういうことを言わせたいんじゃない。彼に見せつけるようにあからさまに眉をひそめて溜息をつくと、クシナはテーブルに箸を置いた。それを見て同様に端を置いたミナトの皿を、半ば睨みつけるよつこまつすぐに見つめる。

「何があつたの？」

言え、と言外に催促すると、ミナトは口を引き結んで黙り込んだ。悠に一分はそうやっていただろうか。やがて、ミナトはやっと口火を切つた。

「「めん、言えない」

結局そののかと落胆してしまったが、ミナトの事情も汲んでやらなくてはいけない。彼は火影なのだから。

「里のこと？」

「うん。心配掛けた？」

「そりゃあね。私の仕事はあなたを心配する」とだから、いつも心配してるわ」

「はははっ、そつなの?」

「わいわい。お皿はちやんと食べたか、とかね」

「そんな」とまで。

「大事なことよ」

やうやって笑い合つて、クシナが箸を持ったのをきつかけにまた夕飯がスタートした。

今日はカレイの唐揚げに野菜の甘酢あんかけをかけたものと、冷ややっことナメ口の味噌汁だ。我ながらよくできたぬか漬けたちも、洒落た小鉢の中に鎮座している。ミナトは、クシナが作る料理をいつも美味しいと褒めてくれる。だけれど、時々作りながら切なくなる時があった。

もしもナルトが生きていたら、きっとこうこうつものじゃなくて、子供が好きそうな柔らかくて食べやすいものを作っていたのだろうな、と夢想する時がある。だからこそ、一年に一度、もう習慣になつていてる息子の誕生日の日には、その夢想の中で思いついたものを思いついただけ作る。そして、仏壇の前にそれらを置いて、ナルトに天国での料理たちを食べてほしいと祈るのだ。

クシナは、ずっと自分を責めていた。自分が九尾の人柱力でさえなければ、ただの普通の女で、普通のくの一でしかなかつたならば、

ナルトは無事に産まれて今も元気に生きていたはずだ、と。この九尾の所為で次の子供の夢も断たれた。それが決まった時、ミナトに離婚を迫ったこともあつたな、と思い出す。やういえば、あの時の彼は珍しく激昂していて、「そんなことするものか」と怒鳴られた。あれは素直に嬉しかった。こんな自分でもいいのだと、必要だと言つてくれて、嬉しかった。

「……ねえ、クシナ」

「ん?」

最後の一つだったナスのぬか漬けに箸を向けたときに掛けられた声に、食べたかったのだろうかと首を傾げる。しかし顔を上げて見たミナトは、クシナにある意味予想外なことを言つてきた。

「もしナルトが生きていたら、どうする?」

「…………え?」

たつぱり間をおいた反応は間抜けなものだった。ミナトの意図がわからない。今その質問をするなんて、どうしたのだらう。

いや、今だからこそするのだろうか。もうナルトが死んでから四年になる。その今だからこそ、もし子供が生きていたとしたらという仮定で、何か話したくなるかも知れない。そうやって、少しだけ幸せな考えを共有したくなるのかも知れない。クシナだって、口に出してはいないが先ほどまで“ナルトが生きていたら”こんな料理を作るだろう、と考えていたじゃないか。

ミナトが、珍しくクシナに弱みを見せてくれたことになるのだろう

うか。そう思つと妙に嬉しくて、小さく笑つて「やつだなあ」と考えた。とりあえず、先ほど思つたことを口にする。

「まづね、食事はこいつ和風で大人好みのじゃなくて、子供が好きそつのを作るかな」

「うん」

「それから、あなたに構つてあげられる時間が今十分の一ぐらいになるわ。きっと」

ふざけた口調でそういう言ひ方、ミナトは「ええ?」と驚きながらも笑っていた。そこには、さつきまでの妙に暗い様子はない。それに人知れず安堵して、「ミナトは?」と聞き返してみた。純粹に気になるところではある。彼ならび、ナルトが生きていたらどうするのか。

「俺は……」

「うん?」

「……そつだな。どうするのかな」

歯切れの悪い言い方だった。せりて促すように彼を見つめていると、彼は何かを噛み締めるよつて口を引き結んだ。

「今ナルトがここに居たら、俺はビリするのかな」

それを自分に対する問いかけだと受け取つて、クシナは答える。

「たぶん、他のお父さんたちと変わらないんじゃないかな」

「やうかな……」

「そうよ。最初は子供とどう接していいかわからなくて、そのうちめちゃくちゃかわいく思えっちゃって、最後に一人立ちされて寂しがるのよ」

「そんなもの？」

「そんなもの」

クシナのナスのぬか漬けを齧りながらの科白は、ミナトには少し腑に落ちないものだつたらしい。納得がいっていないようで首をひねつている。それでもクシナはそう思うのだ。

母親にとつては腹を痛めて産んだ子供。大切だと、愛おしこと想うのは当然だ。逆に、父親にとつてはいきなり現れた自分の子供。最初はどうやって子供と接していくべきのかわからないのが普通だろう。そしてゆっくりと親になつていぐ。小さな赤子を抱いて戸惑いながらも、それでも愛おしい我が子を前に顔がほころぶ。そんな父親の姿を、ミナトの姿を見たかつたと、こまさらながらに思つた。

「…俺、どうすればよかつたのかな」

「何が？」

「うん、なんでも」

この話は終わりだとばかりに声を弾ませたミナトは、カレイに箸を付けて「美味しい」と笑った。

次の日は秋だと言うのにひどく暑い日だった。ミナトが起きるなり「暑い」と呻く程度には不快な気温だったが、同時によく晴れた日だ。洗濯物がよく乾くだろう。

長袖なんて着ていられずタンクトップでいたら、忍服を着込んだミナトに「いいなあ」と羨ましがられた。一見涼しげに笑っているが、彼の額には汗が浮かんでいる。

さすがに羽織を着るのは嫌だつたらしく、玄関に立つたミナトは白い羽織を小脇に抱えていた。額当ても首に提げられている。火影がそれでいいのかと突っ込みたくなつたが、「火影室に着くまでにはちゃんとする」と明言されてしまえば文句も言えない。

「行つてきます」

「はい、行つてらつしゃい」

出て行く彼を見送つてから、いつものルーティンワークをこなす。まずは朝食の食器を片づけて、次に洗濯物を干す。今日はすこぶる天気がいいからシーツも洗つて干した。物干しに並んだ洗濯物は、見ようによつては壮观な光景だ。

それに満足してから、軽く家中を掃除して、そこで午前の半分以上が終ってしまう。しかしあညまでにはまだ時間があった。

消耗品をそろそろ買い足さなければいけない」と思い出して、クシナは買い物に出ることにした。ついでにおညご飯は外で済ましてしまおう。

そう思つて出た外で出会つた銀髪を、クシナは思わず捕まえた。全速力で追いかけた所為か逃げられかけたが、なんとか彼を手中に収める。

「カカシくん、聞きたいことがあるんだけど」

そう言つた時のカカシの顔は、予想外に愉快だった。

10（後書き）

カカシとクシナの港に対する認識は一緒です。あと、親の観念については私の私見ですので、異論などあるかもせんがご指摘はご遠慮いただけたとありがたいです。

なんだかんだ言って投稿です。思ったよりもパソコンに触れていますが、全力で投稿できるようになるのは14日以降になります。

お気に入り登録100件突破しました！！本当にありがとうございます！

火影としてのミナトを理解しているつもりでも、個人的な感情として気になるものは気になる。昨日のミナトの尋常でないその態度の中に、何があるのか気になるのだ。彼が何か苦しみを抱えているのだとしたら、それを少しでも理解してやりたい。彼のすべてを知ることはできなくても、妻として、彼の苦しみと一緒に向き合つていくことはできるはずだ。

里を歩いていたカカシを見つけたのは、そんなことを考えていた時だった。これは好機とばかりに里内でも珍しい銀髪を思わず追いかけて、捕まえて、今は里の並木道にあるベンチに彼を腰かけさせている。カカシを座らせたのは、長身の彼を見下ろすためだ。クシナはカカシの目の前に仁王立ちして、彼を見下ろした。

「『めんつてばね、急に引き留めて』

「はあ……」

反省はそれほどしていなかっため上滑りする謝辞を口にすると、カカシもそれを感じ取つたらしく微妙な反応が返つてきた。内心では心のこもつていらない謝辞に失礼とは思いながらも、相手にそれを読まれるとムツとするのはなぜだろう。身勝手にもむかつ腹を立てたクシナは、目の前の銀髪をぐりぐりと撫でまわした。

「ちよつ、クシナさん！？」

こきなり髪を混ぜつ返されて慌てた声を上げたカカシに満足して、

彼の隣に腰を下ろす。カカシからしたらクシナの行動は挙動不審にしか見えないようで、乱れた髪を撫でつけている彼に訝しげな視線を向けられた。

「それで、聞きたい」とつて何ですか？」

視線に込められた不審気な感情がそのまま乗った声で聞かれた。それにカカシを引きとめたそもそもその目的を思い出し、彼の方に身体ごと振り向く。まどろっこしい真似は嫌いだし苦手だ。今回もない詮索や駆け引きなんて捨てて、知りたいことを直球で聞くことにした。

「ミナトのことなんだけど、最近、あの人になにか変わったことあつた？」

その質問に、実は収穫を求めていたわけではない。クシナの中でカカシは第一犠牲者だった。彼を皮切りに、ミナトに近しい人物に最近の夫の様子がどんなものだったのかを聞いて回るつもりだった。その中で、ミナトの妙な様子に関するヒントが得られればいいと、それくらいに考えていた。

だから、カカシがクシナの問いに神妙な顔で考え込んだのを見て、「おや?」と思つた。もしかしたら、一人目からかなりいい収穫が得られるかもしない。

「ミナト先生、どうかしたんですか?」

しかし、彼はクシナが期待した答えをすぐにはくれる気はないようだつた。こちらに向き直り、そんなことを聞いて来る。

「私がそう聞いてるんだけど」

「すみません……。でも、仕事をことを家に持ち帰る人には見えないで」

それに関してはクシナも同感だ。ミナトはそういう人だ。だからこそ、昨日の様子はおかしかったのだ。

力カシに昨日のことをできるだけ詳しく話して聞かせると、彼は頸に手を添えて考えるそぶりを見せた。それに期待を寄せてその口から発せられる答えを待つていれば、力カシは唐突に立ち上がる。その動きに着いていけず、クシナは一人腰掛けたまま彼の背中に声を掛けた。

「力カシくん？」

「ミナト先生は、クシナさんに何も言わなかつたんですね？」

「そうよ？どうしたの、力カシくん」

何を考えているのか、見上げる背中からは読み取れない。そもそも、クシナは感情を読み取ることはあまり得意ではない。しかしここが不穏な空気だけは、その背中から感じ取ることができた。昨日のミナトのことを聞いて、一体力カシは何を思つたのだろうか。

「奥方様」

「えー？ な、なに？」

呼ばれ慣れない呼び名で突然呼ばれて驚いてしまった。こちらを

振り向いた力カシは、静かな瞳でこちらを見下ろしている。ますますもつて彼の意図がわからなくて、クシナは困惑を隠せずに眉を寄せた。

「これはオレ個人の判断ですので、他言なきよう、お約束できますか？」

「何？ 急に……」

「お願ひします」

妙に気迫のこもった力カシの様子に、クシナは戸惑いながらも頷く他ない。それに頷き返した力カシは、クシナに立ちあがるよう促し、ゆっくりと歩き出した。付いて来るよう指示される。

最近の若い子の考えることはよくわからない。半ば逃避気味の結論を内心に出して、クシナは力カシに着いて行くことにした。

やがて促されるままに力カシの背中を追つて辿り着いたのは、木の葉の病院だった。ここに、昨日のミナトのおかしな様子を説明できるようなヒントがあるのだろうか。あれから一言も話そうとしない力カシには妙に話し掛けづらくて、クシナはなぜ自分をここに連れてきたのか聞けずにいた。困惑している間にも力カシはずんずんと進んでいくし、よくわからずとも従うしかない。彼に着いていけば、何かわかるのかもしないのならば。

力カシが向かったのは病室が密集している棟だった。忍として前線に出なくなつてからは、久しく訪れていなかつた場所だ。しばらく来なくともその雰囲気に大した違いはなく、クシナの胸中に懐かしい想いが溢れた。

「……です」

やつとカカシが口を開いた。その声に意識を彼に戻すと、ガラリとある病室の一つがカカシの手によって開けられたところだつた。気付けばカカシのと距離が思つたよりも空いている。慌てて駆け寄つて、彼が入つて行つた病室に身を滑り込ませた。

そこは小さな病室だつた。ベッドは二つあつたが、使われているのは一つだけのようだ。使用中だと思われるベッドのカーテンを、カカシはゆっくりと開く。

「ナルト」

カカシの声が紡いだ名前に、一瞬耳を疑う。自分で特別なものとなつてゐる名前だ。過敏に反応しすぎていると自嘲したが、すぐにはそれすらも忘れてしまつた。

カカシが向かつたベッドには、小さな子供が寝ていた。金色の髪の小さな男の子。まろやかな頬には特徴的な髭のような痣があり、白い肌の中では異彩を放つてゐる。病院で支給される寝間着に隠れた細い手足には、包帯やガーゼが当たられていて痛々しく見えた。しかし、その眠りは穏やかなのか、子供は穏やかな顔で規則的に胸を上下させてゐる。

クシナはその子から目を離すことができなかつた。その子が寝がえりを打ち、むず痒そうに目を擦る。そうすると、ともすれば間抜けとも表現できそづな寝顔が、こちらを向いた。よく見れば涎が垂れている。

「ナルト…」

自然に口から漏れ出了た我が子の名前。ベッドに歩み寄り、屈んでその顔を覗き込んだ。恐る恐る手を伸ばし金色の髪の毛を梳き、そのまま子供らしいふつらとした頬を撫でる。自分の薄い皮膚越しに、確かな温もりが伝わってきた。

何とも言えない感情が胸を締め付ける。あり得ない想像が頭を巡り、しかしすぐにそれは否定した。それでも溢れるこの気持ちは、否定することができない。

「クシナさん、ナルトを知ってるんですか？」

驚きを含んだ力カシの声に彼を振り向く。どうしてか彼の存在を一瞬忘れていた。仰ぎ見た彼の困惑した顔を田の畠たりにして、クシナは苦笑を返す。

「この子、ナルトって名前なの？」

「はい」

「そう…。実はね、ナルトって、私たちの子供の名前なの」

初めて知る事実だったのだろう。力カシが息を呑んだ。それに笑いかけて、子供ナルトの髪の毛を優しく撫でる。そのように触っていても、ナルトは起きる気配がない。よほど深く寝入っているらしい。

「この子はそつてつだわ、あの子」

生まれたばかりのナルトを抱いたことを思い出す。泣くこともなく、田を開けることもなく、死んでしまった愛おしい我が子。金色の髪の毛で、顔に不思議な痣があつたことは忘れない。一生胸に仕舞つておくはずだつた愛し子とそつくりな子供が、田の前に現れた。

普通は驚くだろうに、クシナは困惑していない自分が不思議だつた。もつと動搖してもいいはずなのに。ただ愛しいと思えてしまつて、行き場をなくしてしまつた母性らしきものが、自分で急に膨らんでいくを感じた。

「この子はいつたい誰なのだろう。クシナをこんな気持ちにさせるこの子は、誰なのだろう。」

「ク…、奥方様、すみません」

カカシの小声が近くに聞こえて彼を見ると、眉間にしわを寄せた彼の顔に出会つた。

「たぶんこのナルトが、四代目様の妙な様子の原因だと思われます」

「え？」

では、ミナトはこの子に会つたことだらうか。だつたら言つてくれればいいのに、と思って、クシナを傷つけたくないと考えたのかも知れないと考え直す。誰もが、死んだはずの子供に会つていつして尋常でこりれるとは限らないのだから。

「あの人は、なんて？」

ミナトの昨日の様子から察するに、受け入れることは難しかったのかもしれない。それも仕方ない話だ。クシナだってすんなり受け入れられたのが不思議なくらいなのだから。

クシナの質問に、カカシはさらに眉間にしわを寄せた。しばらく黙りこんでしまったカカシの様子に首を傾げると、意を決するように彼は口を開いた。

「四代目様は、ナルトを里の侵入者ではないかと、疑われてあります。ナルトは、身元が判明しなかつたものですから」

「…………」

「すみません、まさかそのような事情があるとも知らず」

(… 侵入者?)

沈んだ様子のカカシを置いて、ナルトの方へと視線をやつた。この子が侵入者? そんなことあるはずないじゃないか。こんな無垢な顔をして寝ているこの子は、ただの子供にしか見えない。ミナトはどういう「了見」でやう判断したのだろう。

「カカシくんは、どう思つの?」

「……そんなことは、絶対ないと思つています」

確認のために聞くと、期待通りの答えが返ってきた。クシナもそれに頷き返す。

「ん……」

ナルトが難しい顔をして寝がえりを打つて、また目を擦った。そして薄く開かれた目がクシナを捉え、途端に見開かれる。後方に力カシを見つけて、起き上がったナルトは彼に縋るよう近寄った。初めて会う顔に緊張したのだろうか。そのナルトの行動に、ちょっと傷ついている自分がいることに気付いた。

「大丈夫だよ、ナルト。この方は優しい方だから」

力カシが言つても、ナルトは警戒を解こうとしない。彼の大きな身体に隠れるようにしてこちらを見つめている子供の瞳は、空を思わせる澄んだ青だ。ミナトと同じ色だ、と思つたら、さらに嬉しくなってしまった。

クシナは、なるべく警戒されないようにナルトに視線を合わせて、自分の中で最上の笑顔をその顔に浮かべた。

「はじめまして、ナルト」

「……はじめまして、だつてばよ」

初めて耳にしたナルトの声は、高くて子供らしい響きだった。偶然か、クシナの口癖と似たようなものまで聞くことができた。

「よひしくねー！」

思わず語尾を弾ませたら、ナルトが少し警戒を解いたように見て、クシナはホッと胸を撫で下ろした。

力カシがクシナにナルトのことを話したのは、ミナトに対する小さな反発心からだつた。ナルトを監視するなんて命令、はつきり言つて従いたくもない。それでも従うしかない一介の忍である力カシが、思わず取つた行動だつた。自分のことながら、若さゆえに判断がよくできなかつたのかもしれない。それに、奥方様にならば多少のことがばれても、口の堅い彼女のことだ。きっと大丈夫と思ったのもある。

力カシの隣で、目を覚ましたナルトと一緒に楽しそうに絵を描いているクシナを見て、力カシは複雑な気持ちを吐き出すようにため息を吐いた。

ナルトは、ミナトとクシナの間にできた死んだ赤ん坊と名が一緒に、容姿までよく似ているらしい。力カシはそれに少なからず衝撃を受けた。そういうば“うずまき”という姓も、クシナのかつての姓だ。だとするならば、昨日ミナトがナルトに会つた時の妙な反応も頷ける。その夜もおかしな様子だつたし、ナルトに会つたことで動搖していたのだろうか。

(さすがの火影も、動搖せざるを得ない、ってことか)

そう考えて、もう一度クシナに視線をやる。彼女はどうなのだろう。目の前に死んだはずの我が子と瓜二つの子供が現れたのならば、ミナトの反応の方が正常であるように感じる。彼のように動搖して当然だ。しかし、クシナは動搖するような見せず、むしろ笑っていた。その笑顔があまりにきれいで、最初にナルトを目にした彼女

の様子に、カカシも思わず目が奪われた。

愛おしそうに眠っているナルトの髪を撫でるその顔は、カカシの記憶の中には終てこない表情である。母の愛情を知らず育った自分には懐かしさも感じられないが、あの顔がきっと“母親”なのだろう。

「えーっと、クシナねーちゃん？」

「あやーーー姉ちゃん！？ そんなに若く見える？」

深く考え込んでいたカカシの耳に唐突に飛び込んできた高い声に、呆気に取られてそちらを見る。クシナが頬に手を当てて真っ赤になつていた。照れているというか、むしろ喜びが爆発していると言つた感じか。彼女と顔を合わせる機会はそこまで多くないが、こんなに明るい顔は久し振りに見る。

「ナルト、私のことはおばけやんでいいよー。私、あんたと同一年の子供がいたんだから」

「そーなの？でも、おばけやんには見えないってばよ

「もーーーつまーになー、この子はー！」

ナルトがもう少し大きければ、その背中をバンバン叩くのが目に浮かぶようだ。実際、代わりとばかりにカカシはクシナに背中を強かに打たれた。遠慮の感じられないその力は強い。なかなかに痛かつた。赤くなつていなければいいが。

「クシナさん……」

非難の視線を向けたが、どうやらそれはクシナに届かなかつたらしい。上機嫌でナルトを撫でまわす彼女の視界にさえ、カカシは入つていないうだ。

カカシは先ほどとは違つ意味合いを乗せたため息を吐いて、とりあえず諸々のことを考えるのをやめた。今はただ、ナルトとクシナの平和な掛けあいを見ていた方が精神衛生上言い気がする。

あれからしばらくナルトと話していたクシナは、また何度か来る約束を取り付けたらしい。カカシと並んで病院を出た後の彼女は終始ご機嫌だ。鼻歌まで聞こえてきそうな雰囲気である。今なら訊けるだろうか。カカシは、好奇心に勝てず隣を歩く彼女に声をかけた。

「クシナさん」

「なに?」

「驚かないんですか、ナルトのこと」

「驚いたわよー」

あつけらかんとした口調に、カカシは少々虚を衝かれた。変わらず楽しそうな彼女は、不思議な色をした瞳を細めて語りだす。

「でも不思議よね。あの子のこと、何でこんな自然に受け入れられたのかしら？」

驚くほどに長い赤い髪が揺れて、秋なのに強い日の中の光に透けて虹のように光る。ずっと姉のように思えていた彼女が、不思議と違う女性のように見えた。

「あの子が“ナルト”なわけないのにね」

確信の篭つた硬い声が、やけに耳に響く。カカシはふと、病院のほうを振り仰いだ。

ただの子供だと思っていた。しかし、ナルトが彼女とミナートの子供とそっくりで、名前まで同じ子供。偶然と素直に納得するには出来過ぎている気がする。

ますます、わからなくなってきた。ナルトが何者か。侵入者だなんて、信じたくもない。だが、しかし

「カカシくん？」

クシナの声に振り向く。カカシは曖昧に笑って、自分の中に生じた動搖を悟られないように小さく眉を顰めた。

12 (後書き)

一話一話やがまちまちですみません；

赤い髪の女人が初めてナルトの病室を訪れてからここ何日か、その人は毎日のようにナルトの前に現れた。その人が病院に訪れるることは、ナルトとたわいない話をすることだつたり、ナルトのリハビリに付き合つことだつたり。散歩に一緒に行くこともあつた。いつもやることは少しずつ違うけど、彼女はいつも楽しそうに笑っているのが印象的だつた。

「やつほ、ナルト」

そして今日も、腕のリハビリを終えたナルトの元にその人は現れる。クシナと言う名前のその人は、長い長い赤い髪の綺麗な人で、ナルトはその人に会うたびに妙に緊張して、恥ずかしい思いをしていた。今日も見ることが出来た彼女のキラキラした笑顔に、ナルトはどう反応していいか分からなくて、「もじ」と口をまげつかせる。

そんなナルトを知つてか知らずか、クシナは病室に入るなりうきうきとした様子で手持ちの鞄を漁り出した。

「今日のお土産は～、リンゴだつてばね！」

そう言つてクシナの白い手が掲げたのは、真っ赤に熟れたリンゴだつた。彼女の髪の色と同じ赤のリンゴは、それだけでなんだかとつても魅力的に見える。鼻に届く甘酸っぱい匂いもナルトの興味をそそつた。

「ナルトのほっぺと同じ色だあ」

キシキシと笑いながらクシナはそのリンゴをナルトの鼻先に差し出す。咄嗟に受け取ったそれはナルトの両手にも大きく感じた。でも、自分の頬の色よりはクシナの髪の色の方がこの色に近いし、そっちの方が綺麗な気がするのに。

「おばちゃんの髪の方が赤くてきれいだつてばよ」

自分の頬と比べての意見にクシナは一瞬キヨトンと顔を呆けさせたが、すぐににっこりと満点の笑顔を浮かべた。

「あなたは本当にまいまいね～！」

ここに来た時よりもさらに機嫌が上向きになつたらしいクシナは、ナルトの手にあつたリンゴを取り、持参した果物ナイフで鮮やかに剥き始めた。あつという間にウサギを象つたリンゴが完成して、ナルトは目を輝かす。

「すげー！」

「どうだー！」

手に取った見事なウサギリンゴは可愛らしくて、食べるのがもつたいなかつた。だが、傍でクシナが何のためらいもなく頭から口に運んでいるのを見て、ナルトも同じようにウサギリンゴを頭からかじる。蜜がたくさん詰まったリンゴは甘くておいしかつた。

「おいしい？」

「うまいってばよー！」

あつという間に一切れ食べきつて、一切れ目に手を伸ばす。一匹のウサギリングゴもおいしかった。クシナは最初の一切れを食べたきりリンクを食べる気配はなく、ナルトが懸命に食べている様子を見守っている。見られていると少々食べにくい。

「あんま見ないでってば」

「あ、ごめん。見てたかな？」

照れくさいのか顔を赤くしたクシナは、ナルトから視線を逸らして、手提げの鞄から裁縫道具らしきものを取り出しそれを弄り出した。少し前にも同じものを病室に持ち込んでいたことを思い出す。ナルトが、それが何なのか聞いてみると「火影の羽織よ」とクシナは大きな布をバサリと広げた。ナルトには読めなかつたが、その布には漢字の刺繡が途中まで施されている。

「火影つて、三代目のジッチャン?」

「ううん、三代目様じゃなくてね、四代目よ」

四代目という言葉に、少し前にここを訪れた金髪の大人を思い出す。四代目火影を名乗っていたが、ナルトの記憶では四代目は九尾襲来の折に死んでいる。確かに見た目は写真で見た四代目火影によく似ていたが、結局あれが誰なのか、ナルトの中で明確な答えが出ていなかつた。何より、あの人はナルトが嫌いみたいだつたから、考えること自体嫌で考えないようにしていたので、答えを出しようもないのだけれど。

確かカカシも彼のことを四代目火影と呼んでいたし、もしかした

らあの人が四代目火影であることは事実なのかもしれない。だとしたら、三代目のジッチャンや里の人々が自分に嘘をついてきたことになる。それを思つて、やはり自分は里人に嫌われているのだと肩を落とした。三代目のジッチャンまで嘘についていたなんて、信じたくはないが。

クシナは、広げた布を畳んでまた針を構えて刺繡を再開していた。

「四代目の火影はね、私の夫なの」

「おつと?」

「旦那様つて」と

「あの人、おばちゃんふーふなんだつてば?」

「そうよ」

金髪の大人とクシナを頭の中で並べてみた。悔しいがお似合いに見える。優しいクシナと自分を嫌つていると思われるあの人が夫婦だと思うと、なぜだか複雑だ。

そういうえば、何でクシナはナルトにこんなに優しいのだろう。力カシもそうだ。なぜ、自分にこんなに優しいんだろう。里人に嫌われている自分に優しくなんでしたら、彼らも田をつけられてしまうかもしれないのに。

「……おばちゃん

「ん? 何、ナルト」

クシナは、刺繡を進める手元から顔を上げて、ナルトに笑いかけてくれる。こんな風に笑ってくれるのはなぜなのか気になつて、ナルトは思い切つて聞いてみた。

「おばちゃんは、なんでオレに優しいんだってば?」

クシナの目が見開かれる。その瞳は次の瞬間には僅かに伏せられて、すぐに微笑を作った。手元の裁縫道具をベッドサイドに置いた彼女は、おもむろにナルトに手を伸ばすと、その両脇に手を差し込んで抱きあげた。驚いたナルトが気付いた時には、小さい自覚がある自分の体はクシナの膝の上に乗っている。ぎゅっと、彼女の腕が腹の辺りに回されていた。

「私には、あんたと同じ年の子供が居たんだ」

「うん、前に言つてたつてばよ」

「実は、その子はね、私のお腹から出た直後に死んじやつたの。…私はね、ナルト。きっとあの子が、あんたを連れてきたんだと思つてる」

クシナの言つていることの意味がよくわからない。「わかんね」と口にしたら、「それでいい」とクシナはナルトの頭を撫でた。

「ナルト、あんたはあの子によく似てるよ」

「おばちゃんの子供に?」

おばちゃんの子供といふことは、あの人の子供でもある。四代目

火影と偶然目の色も髪の色も同じ自分は、もしかしたら死んでしまつたと言つその子に似てゐるのかも。

「やうよ。だから……おばちゃんに、あなたの母さん代わりをやらせてもらえないかな」

びっくりした。びっくりして眼玉が飛び出るかと思つた。思わず振り仰いだクシナの顔は、いつも楽しそうなものとちよつと違つて、ほんわか温かくなるような笑顔で、見慣れない表情にドキドキした。

(おばちゃんが、母ちゃん?)

想像してみて、それはとても素敵なことのように思えた。優しい彼女が自分の母になつてくれる。今まで想像上の登場人物でしかなかつた“母”という存在が、急に確かなものになつていく気がして、こみ上げる思いにナルトは嬉しくなつた。けれど、でも、自分は里の嫌われ者だ。そんなナルトの母になつて、クシナがいい気分でいられるはずがない。きっと良くないことが起きる。そう、確信にも近い思いがあつた。

「おばちゃんは、おばちゃんだつてばよ」

だから、そつと言つた。

クシナの顔を見なじようにして言つたその言葉に、彼女は「そつか……」と小さく返しただけだった。

13 (後書き)

しばらく更新できなくてすみませんでした。ちょっとあげるか悩んでいたので…。推敲不足が否めません……、

雨が降っていた。それはまるで、ミナトの陰鬱な気分を表しているように思える。まさか自分の気分だけで天気が変わるなんて、そんなことはあるはずないが。少なくとも沈んだ気分を増長する効果はあった。

「この冷たい秋雨に打たれながら帰路を辿る。自宅に帰れば、いつも同じようにクシナがこちらに笑いかけてくれるはず。そう思つて到着した家の中に「ただいま」と声を掛けたが、いつもは返つてくるはずの声がなかつた。もう一度繰り返してみても、結果は同じ。静かな屋内が不気味で、雨に冷えた廊下が空寒く、その雰囲気に妙な不安に翻られたミナトは急いた動作で中に踏み込んだ。

しかし仏間であつさりとクシナを見つけて、ほっと息を吐く。仏壇で細い煙が線香から焚き上がっているのが確認できたが、それはもうそろそろ燃え尽きそうである。彼女は、一体どれほどここでの格好でいたのだろうか。

なんとなく、声を掛けることは憚られた。やつくりと気配を教えるように意識して仏間に踏み込めば、忍であるクシナはこちらに気付いてくれるだろう。そう思い足を進めると、赤い髪がさらりと揺れて、彼女はミナトの方へ顔を向けた。もしかしたら泣いているのかもしれないと思つた妻は、むしろどこかすつきりとした顔で小さく笑つた。

「おかえりなさい、ミナト」

「うん、ただいま」

いつもは玄関で交わされる会話をなぞつてからクシナの横に腰を下ろし、ミナトも仏壇に向かって手を合わせた。

もうナルトの命日から数えてどれほど経つだらうか。十月も終りを迎えるとしていて、日々季節は秋から冬へと向かっている。今日の雨も、冬の予兆を感じる冷たさを伴っていた。

ナルトを失ったあの年。その年は雪が多く降った。白く閉ざされていく里を見て、その頃の自分は果たして何を考えただらうか。記憶を探つてみたが、思い出すのは難しかった。

「どうしたの、何かあった？」

前に彼女に聞かれたことと重複同じことを聞くと、クシナは首を振つた。

「何でもないわ。」
「飯、今用意するから」

返ってきた返事は素っ氣なもので、ミナトを置いてクシナは仏間から出て行く。その背中を見送つてから、線香の煙へと視線を戻した。風の入らないこの部屋で、しかし僅かな空気の流れに揺られてたなびく煙を見つめながら、ミナトはまた大きく息を吐く。

あの子供についての処分が決定しそうだった。とりあえず監視下には置いて処遇については保留しておいたが、あの子供をそのまま野放しにしておくわけにはいかない。三代目や長老、暗部のダンゾウを含めた会議での子供について話し合いが交わされ、案の定と言えばいいのか、あの子供は拘束して里の管理下に置くことになった。あの小さな子供を、犯罪者として扱うことが決定したのである。

最後まで粘つたのは三代田だった。子供をそのように扱つては関して、ひどく嫌悪感を抱いていたようだった。それに、あの子供がミナートたちの子供と瓜二つだと叫ぶことはその場の全員が知っていたことだが、三代田は特にそれを気にしていた。そのようなことから子供に対する処遇を検討し直せとしつこく食い下がつていたが、結局は多数の意見に押された形になつて主張を下ろしてしまったのだ。

(俺はどうするべきだった?)

自問するよし、会議での自分を思い出す。ミナートは、その決定に対しても「問題ない」と言つたきり、それ以外は特に発言をしなかつた。

自分は里のトップである。もしミナートが強硬な姿勢で「あの子供はいぢりで保護する」などと主張すれば、通らないこともなかつたはずだ。しかし、それをしなかつた。する必要はない」と、判断したからだ。あの子供が侵入者の可能性は高い。そうではなくとも、不穏分子には違いない。ならば里の安全を考えた方策を取ることが一番なのだ。

やうだとわかつてゐるのに、未だに迷いが胸に渦巻く。ナルトにあの子供が似ているからなんだと言うのだ、と吐き捨てるように考へても、どうしても割り切れない自分が居た。

(一体あの子供は何なんだ)

あの子供を送つてきたどいかの組織の策で、あのような姿と名をしているのか、もしくは考えられないが、偶然か。詳しく調べなければ

れば分かるはずもない。とにかくそれは、あの子供を拘束してからだ。

近いにひし、カカシロのことを言わなくてはいけない。あの青年がどんな顔をするのか、想像したくもなかつた。監視の任務を言い渡したときでさえ、親の仇を見るような目で見られたのだ。拘束とまでなつたら、果たしてどんな恨めしい目で見られるのか。しかし、それを甘んじて受けるのが、里の泥を被る立場としての義務だ。

「ミナート、飯出来たよー」

「ああー今行く」

山所からのクシナの呼びかけに返事をして、音を立てないように立ち上がる。ふと仏壇に手をやると、燃え切きた線香はまだわずかに煙を吐き出していた。

翌々日、田が頂点に達する時間帯、ミナートは木の葉病院に向かっていた。何のことはない、特に意味はないが、あの子供に一回会つておこうと思ったのだ。直接言葉を交わすつもりはなく、ただ、もう一度見てみたかった。ただそれだけだ。

明日には子供の処遇の最終決定が下ることになつてゐる。こんな日でのあの子供を見る」とも、もしかしたら今日が最後になるかもしれない。そう思つと、見ておきたかった。

似ているだけだと考えようとしても、そうやって結局はそう思いかれていない自分に自嘲の笑みが零れた。どうせそなうなら、今日は火影としてのじがらみやあの子供が何者かという疑問は捨ててしまおう。ただ、ナルトが成長した姿を、あの子供から夢想すればいい。最初からこんな気持ちでの子供に向き合えば、恐がられる事もなかつたのだろうか。

やがて到着した木の葉病院の奥まで進み、記憶にあるあの子供の病室を覗き込んだ。よく考えれば、窓から伺つた方が周りに怪しまれない。失敗したな。

そう思いつつも見た病室は、予想に反して誰もいなかつた。拍子抜けして中に踏み込むと、直後に看護師が病室の前を通りがかつたので、彼女に「この病室の患者は？」と尋ねた。火影に突然話しかけられて看護師は当惑した様子だつたが、それでもしつかりとした口調で答えてくれた。

「ナルトくんなら、今中庭にいますよ

そう言つて指差された方角は、病院の一いつの棟を繋ぐ渡り廊下がある方向だ。そう言えばあそこには中庭があつた。看護師に礼を言つて、そちらへと歩き出す。

ナルトが中庭にいると言つことは、カカシもいるのだろうか。あの小さな子供が、しかも怪我をしている子供が一人で出歩くのはちょっとと考えにくい。もしくは看護師か医者と一緒になのだろうか。そつちの方がどちらかと言えばありがたい。カカシでは気配を殺していくも氣付かれる可能性がある。

中庭に至る渡り廊下から見た空は、青かつた。今日は雨が降っていない。これならば、ナルトも中庭で散歩をする気分になるはずだ。肌寒くはあるが過ごしやすい陽気の今日は、確かに散歩をするには丁度いい。

渡り廊下に入ったところで、気配を殺し、音を立てないように移動した。中庭の出入り口となっている大きな引き戸のガラス窓から、中庭をうかがう。

最初に目に入ったのは見慣れた銀髪だ。やはり居たのかと思ったカカシのその腕の中に、ふわふわと揺れる金髪を見つける。

(……ナルト)

少し前に会った時と違い、ずいぶん明るい表情だ。カカシに心を許している証拠なのか。そう言えば巻かれている包帯の数もずいぶん減つて、今日立っているのは吊られている右腕だけだ。回復は順調らしいとそこから悟る。カカシがこちらに提出してくる報告書には、怪我の経過までは書かれていた。彼の反感がひしひしと伝わる簡素な報告書だ。

その報告書も、もうすぐ受け取ることはなくなるだろう。

田を細めて一人を見つめていると、カカシの大きな身体の影から、誰かが顔を出した。彼に隠れて今まで見えなかつたその人は、赤い長い髪の、女性だ。

「……な

それは、クシナだつた。彼女は、カカシの腕に抱かれたナルトを

静かに見つめている。

クシナがあの子供のこと気にっていたなんて。迂闊だった。

「クシナ……」

思わず彼女の名前が口から漏れ出た。それに耳聴く気付いたらしいカカシが、ぱっとこちらを振り向く。ミナトはクシナから視線を外すことが出来ないまま、中庭にゆっくりと踏み込んだ。

14（後書き）

木の葉の病院に中庭つてありましたつけ？なかつたらじめんなさい；
実は、ミナト視点の地の文で恐らく初めて“ナルト”と呼ばせてみました。分かりにくいですが作者的には大きな変化です。

クシナを連れ立つて病院を訪れてからしばらく経ったある日、先日頼んでおいたカウンセリングの結果が出たと聞いて、カカシはナルトの主治医を訪ねていた。しかし主治医から告げられた診断結果に、カカシは信じがたい思いを込めて口を開く。

「わからなかつた？」

怒りすら込めた口調に、医者はなんとも言えない苦笑を返してきました。

「はあ、すみません……。専門の先生は、少なくとも嘘は付いていないとおっしゃっていたんですねが、記憶障害があるかどうかは……」

「はぐ、ナルトが小さすぎるのがいけないらしい。この歳の子供は妄想と現実の区別がついていないのが普通であるとも言えるし、多少現実と矛盾するようなことを言つたとしてそれがイコール記憶障害であるかどうかは判断しにくい、だそつだ。」

役に立たない、と内心悪態をつきつつ、カカシは説明を受けてから早々に主治医の元を去ることにした。話を聞いていた診察室から出る際、主治医の口からナルトが中庭にいると聞いた。もづ歩けるようになっていたのかと、驚くと同時にその回復に喜びを感じる。

「足はもともと骨を折っていたわけではなくて捻挫程度だったので、もづ歩ける状態なんですよ。クシナ様が」一緒に歩くから

主治医の言葉に目を見開く。彼女がナルトと初めて会つてから、もう一週間ほどになるだろうか。あのあと何度も尋ねたと彼女の口から聞いてはいたが、今日も来ているとは思わなかつた。

なんとなく早足で中庭に向かうと、確かにそこには一人がいた。折れた腕を吊つてゐるが元気そうなナルトが、庭を飛びぶちょうちょを追つていて、それにクシナが付いて行つている。カカシに先に気づいたのはクシナで、ナルトにそれを告げてゐるのが見えた。

まるで本当の親子のように見えたその光景に、カカシは目を細める。

「ナルト」

「あー・カカシにーちゃん!」

呼んでやれば駆けてくるナルトを胸に迎えて抱き上げ、遅れてやつてきたクシナに小さく会釈した。

「今日もこいらしてたんですね」

「ええ。昼間は暇だから」

クシナに笑い返しながら、カカシは腕の中の子供に視線を移した。

「カカシにーちゃん、背たけー！」

笑顔全開のナルトは、急に高くなつた視界に気分が高揚しているようだ。ケラケラと笑つてゐるその様子を見ながら、カカシはふと考へる。

ミナートにこの子供が侵入者かもしだないと告げられたとき、そんな馬鹿な話があるかと自分で一蹴した。ナルトは普通の子供でしかないと、カカシは自信を持って言い切れたし、彼がそこまで敏感になる理由もわからなかつた。しかし、彼がそれを疑う理由は確かにあつた。

ミナートの実子と瓜二つな、名を同じくする子供。

果たして自分の判断が正解なのか、カカシはよくわからなくなつてきていた。

カカシは、ナルトが一体どこから来て、どうしてそこで倒れていたのかもう一度きちんと聞くべきだと考えていた。それをクシナの前で聞くことは憚られたが、カカシがナルトに直接会える機会はそこまで多くない。ナルトの監視を受けた身ではあつたが、他の任務も無視出来るはずもなく、カカシがいない間は仕方なく他の暗部に監視が任せられている。その報告書には最終的にカカシのチックが入るので、この監視の任務を受けたことに意味が無いことはないだろうが、やはり暗部に任せるのは気分が良いものではない。

いつまでも先延ばしにすべき問題ではないし、今聞いておいた方が得策だ。

「ナルト、ちょっとといいか？」

「え、何？カカシにーちゃん」

「うん。お前、何で

「

「……クシナ？」

その声に、カカシは弾かれたように中庭の出入口を振り向いた。病院の建物から中庭に出るには、一つの棟を繋ぐ渡り廊下を利用する。病院内も基本的に土足があるので、中庭と渡り廊下の出入りは自由だ。カカシがそちらに視線をやると、その渡り廊下に立つている人物が、わずかに眉間にシワを寄せてこちらに近づいて来ているところだった。目を引く金髪が揺れている。

「クシナ、何でここに……」

四代目火影、波風ミナトが、そこにいた。

15（後書き）

短めかつ話が前後していますが、カウンセリングの結果をお話に差し込んだかったので。

次回は少々お待ちください。

ナルトが身構えたのが腕の中の子供の動きで分かり、カカシは小さな身体を抱く力を少し強めた。ミナトはナルトを侵入者だと疑つてかかっている人だ。ナルトが警戒し怯えるのもわかる。カカシはナルトを抱えたまま、こちらに歩み寄るミナトを見つめた。

彼は何をしに来たのか。ナルトの様子を見に来たのだろうか、それともカカシが監視の任務に眞面目に取り組んでいるかどうか、チエックにでも来たのだろうか。

ふと隣のクシナをうかがいみると、ミナトと静かに視線を交わしている。その雰囲気が妙に恐ろしく、カカシはつい何歩か後退した。

「クシナ……」

ミナトのそれは静かな声だったが、確かに怒りが込められていた。雰囲気でそれを悟つたのだろう。ナルトがカカシの服を掴む手に力が込められる。カカシは安心させるようにその小さな背中を撫でた。

「カカシ、どういうつもりだ」

矛先がこちらに向いた。その言葉から監視の報告書のことを言つているのだと解釈して、カカシは眉を顰める。クシナとナルトを引き合させたのは自分で、それはミナトの判断を仰がずに行つたことだ。無論、そのことを報告書には記載しなかつた。クシナをナルトに会わせるときには、そのことがミナトにばれた場合にはある程度の処分を覚悟していた。しかし、まさか彼らの子供とナルトが瓜二つで、しかも名前まで一緒だなんてそのときは知らなかつた。処分を

受けた程度の覚悟で、彼らを引き合わせるべきではなかつたのではと、カカシの中で後悔が首をもたげる。今更ながらに、クシナをナルトと会わせたことの意味の大きさを痛感した。

「申し訳ありませんでした」

ナルトを抱いたまま僅かに腰を折るが、ミナトはますます顔を歪めただけだった。

「……クシナ、ちょっと来い」

何度かカカシたちとクシナを視線で見比べた後、ミナトはそう言った。クシナの返事を待たずに翻つた白い羽織を追うように、クシナは無言でそれに着いて行く。カカシは咄嗟に、歩き出した彼女に声を掛けた。無言で見送ることはできなかつた。

「クシナさん、あの」

「大丈夫」

言いきる前にかぶせるように言われた言葉は、彼女らしい強い光を放つてゐるようだつた。それ以上何も言えなくて、カカシは渡り廊下へと消えて行く一人を見送る。

だが、ここで立ち尽くしているわけにもいかない。

「ナルト、病室戻るよ」

「……うん」

ミナトが居なくなつてほつとした様子のナルトを抱えたまま、病室へと急いだ。そしてベッドに座らせたナルトに「すぐ戻る」と言ひつけて、ミナトとクシナが居るであろう方向を手指す。カカシの鼻は忍犬並みの嗅覚を持っている。よく知つた彼らのことならば、すぐに見つけることが出来る。

匂いを辿つた先は、屋上に続く階段だつた。音を立てないようにな無音で階段を登る。階段の踊り場に彼らの姿はなく、微かに話し声が屋上の扉の向こう側から聞こえてきた。二人は屋上にいるようだ。

カカシは、もしもミナトがクシナを一方的に攻めているならば、その責は自分にあると謝罪をするつもりだつた。このことでの仲のいい二人に亀裂が入るなんて、そんなことはあつてはならない。とりあえず一人の間に入るタイミングをうかがうため、失礼だとは思つたが盗み聞きの姿勢に入つた。こついうとき、忍をやつしていると楽だ。

「何で黙つてた」

ミナトの固い声が聞こえた。

「……言つたらどうなつてたの」

「それは」

「あなたはあの子と私を会わせたくなかつたんでしょう? 私もあなたがつたら、たぶんそうしてゐる」

「……どうまで知つてるんだ」

ミナトの言葉に、クシナを責める様子はない。とりあえず安心して、カカシは一人の会話に耳を傾けた。

「ミナトが、あの子のこと侵入者だつて疑つてゐることは、知つてゐ。ねえ、あの子は、……ナルトは、どうなるの？」

「……処分が決定しそうだ。里の管理下に置くために、拘束する」

それにカカシは思わず目を見開いた。監視の任務を言い渡されているが、そのことについては知らされていない。

「そんな

「仕方ないんだ。それに、よく考えてくれ、クシナ。あの子は“ナルト”じゃない」

「わかつてゐわー！そんなこと……。だけど、あの子はただの子供じやない！」

「ただの子供かどうかは、『あらが判断する』ことだ」

「ミナトっー！」

僅かな物音が聞こえた。チラリと扉のガラスから彼らを覗き見ると、クシナがミナトに掴みかかっている。

カカシはすっかり踏み込む機会を逸して、一人の様子を静かに見守つた。

「あの子供はナルトじゃないだろ、君が肩入れすることはない」

「あの子がナルトがどうかなんて、この際関係ない！お願い、あなたは火影でしょ？何とか出来ないの……？」

「クシナ……。何度も言つよ、あの子供はナルトじゃない。代わりにしちゃダメだ」

ミナートの口調はあるで幼子を宥めるようなそれだ。それを語つたのか言われた内容に血が上つたのか、クシナは一層声を荒げた。

「代わりになんて、そんなつもりないわ！……確かに、重ねてないつて言つたら嘘になる。だけど、だけど……。あの子に会つたとき、守りたいって、愛したいって思つたのよ。この気持ちは嘘じやない……」

絞り出すようなクシナの訴えだつた。カカシはそれを聞いた瞬間の気持ちを、言葉にすることが出来ない。胸を絞めるような感覚だけが強く残つた。

「……ねえ、ミナート、お願い。もし何かあつた時の責任は全部私が取る。もしものときは、どんな処分でも受けるからーねえ、だから、お願ひ。あの子のこと、もう少し考えて」

そこで会話は途切れた。しばらく無言が続いた後、クシナはミナートを掴んでいた手を離し、ミナートはそんな彼女を言葉もなく見下ろしている。

そうして、果たしてどれほどの時間が経つだらうか。唐突に足音が聞こえ、出入り口の扉が開いたことにカカシは不覚にも瞠目した。現れたミナトは、ほんの一瞬カカシを一瞥すると、背後にはクシナに一言小さく、しかし確かに伝わる響きを持って告げる。

「勝手にしろ」

それだけ言って、ミナトは階段を下っていく。カカシは咄嗟にその背中を呼びとめた。

「先生！」

足を止めたミナトは、しかしこちらを振り向かない。

「いいんですか？」

投げた疑問はあまりに曖昧だった。それでも伝わると思つたからこそ、余計な言葉は削つた。

ミナトは逡巡してこちらよじまびらかへ無言でこると、やはり振り向かずにカカシに命令する。

「……監視を続ける。手は抜くな」

暗に情に流されるなど、そう言いたいらしい。だが、情に流されてしまつてるのは貴方だらう、と突つ込みたい。

しかしそう思いながらも、カカシはひどく安心していた。あの命令は、つまりこれ以降も監視続けるということだ。それは、ナルトを拘束する話が流れる可能性を示唆した言葉だらう。

カカシは命令の言葉を残して去つて、火影を追つことはず、屋上に残つて、クシナの方へ足を向けた。彼女は屋上の真ん中に座りこんでいる。

「クシナさん……」

名前を呼んだ後、何と声をかければいいのか、迷う。座りこんだ彼女は呆けたように空を見上げていた。ぼんやり開かれたその口がやがて、薄く笑みを作る。眉間にしわを寄せたその笑顔は、まるで何かを堪えているように見えた。

「また、甘えちゃったんだなあ……」

また、とはどういふことなのか。クシナの笑みの意味がわからず、カカシは結局、彼女が立ち上がるまでクシナに話しかけることはできなかつた。

16 (後書き)

遅くなつて申し訳ありませんでした。
のちに改訂の可能性あります。

カカシが帰つてこない。

ナルトは、カカシが消えて行つた廊下の方向を睨みつけていた。カカシがナルトに病室にいるようにと言われてからどれだけ経ったのか、時計を読むことが出来ないナルトに正確な所は分からない。だが、これはずいぶん長いのではないだろうか。一人が慣れているナルトだったが、こらえ性がないのは性分であるし、もともと子供であるので我慢は苦手だ。

つまり、ナルトは退屈している。いつまで病室に居ればいいのだろうか。暇ならば昼寝をしようとも考えたが、クシナが来る前までぐつすり寝ていたので、ベッドに横になつてもさつぱり眠気は襲つてこなかつた。絵を描こうかとも思つたが、あまり乗り気がしない。それならばカカシと遊ぶのが一番だと結論付けたわけだが、そのカカシはいつまで待つても帰つてこない。

(早く帰つて来いつてばよ!)

暇で仕方がないナルトは、そんな念を飛ばしながら廊下を睨みつけていた。カカシが来るのを見つけたら、隠れて脅かしてやるつもりだつた。銀髪の彼の驚いた顔は、想像するだけで愉快だ。怒られたつて知るものか。待たせているカカシが悪いのだ。

「ねえ」

そのとき背後から突然掛けられた声に、ナルトは飛び上つた。もしかしてカカシに回りこまれたのだろうか。瞬間にそう予想した

が、振り返った先に居たのはカカシではない。金髪に青い目をした大人が、屈みこんでこちらを見ていた。

「うわっ！」

そのことにさらに驚いて、ナルトは病室に逃げ込む。ベッドを囲むカーテンに身をくるむように、咄嗟に身を隠した。

あの大人のことは覚えている。確かに、四代目火影だと名乗つていた。写真で知った四代目火影は好きだったが、彼はナルトを嫌う大人の一人だった。だつたら、警戒を解くわけにはいかない。

「そんなことしなくてたって、取つて食つたりしないよ」

大人はカーテンを捲り上げて、あつさりとナルトを見つけてしまつた。ナルトはどうしていいか分からず、きょろきょろと視線をさまよわせる。やっぱりこの人は苦手だ。第一印象があんまりよくなかつた所為に他ならない。

逃げ出したいが、生憎とナルトが咄嗟の隠れ場所に選んだ場所は壁際だつた。大人に立ちふさがられては、小さなナルトには太刀打ちできない。

（どうしようつてば…）

そういうしている間に、大人の手がこちらに伸びてきた。

（殴られる…？）

思わずきゅっと目を閉じて身構えたが、いつまでも殴られる気配

はない。何があつたのかと恐る恐る目を開けると、金髪の大人は、ナルトに手を伸ばした姿勢のまま、そこにいる。

彼の眉間に皺が寄っている。ナルトにはそれが不機嫌の象徴だと思っていた。なのに、この人から嫌な雰囲気は感じられない。

彼は、一度と動かないんじゃないかと思つくらい長い時間その格好のままだった。そのうちその手は何かを握りこむように拳の形を作つて、彼の体の横に戻つっていく。心なしか、その拳が震えているように見えた。

もしかして殴るのをがんばつて我慢しているのだろうか。そう思うと、ナルトの中で子の大人の評価が少しだけ上がる。今まで会つてきた大人たちは、自分を嫌い、何のためらいもなく暴力を振るつてきたような人がほとんどだった。それを我慢するだけで、その人はナルトの中で、ほんの少しだけだが“いい人”に分類された。子供の感覚はひどく一般からずれていた。

「……ねえ、君は、どこから来た？」

大人の言葉に、ナルトは首を傾げた。どこから、というのはどういう意味だろう。どこからこの病院に着たのか、という意味ならばそれはもうナルトにもわからない。自分が倒れた場所などとうに忘れてしまつている。あとは、ナルトという存在がどこから来た、といつことだらうか。それならばナルトにも答えられる。

「母ちゃんのお腹の中からだと思つてばよ」

その母がどこ誰か、ナルトは知らなかつたが。

「……そうだよね。ん」

それきり、彼は黙り込んだ。

「なあ、どうしたの？」

堪りかけてそう話しかけるが、彼から反応はない。なんなんだ。

金髪の大人と対峙することにだんだんと飽きてきたナルトは、早く立ち去って欲しかった。

「……ナルト」

「なに？」

さよならの挨拶をしてくれるのか。彼の呼びかけに応えながら、ナルトは期待していた。彼はまたしばらく口を引き結んだあと、こちらに手を伸ばしてくる。

何となく、今度は殴られると思えるような恐怖を感じなくて、その所作を田で追つた。伸びてきた手はナルトの頭に乗る。温かい、大きな手だった。その手が、ナルトの金髪をかき混ぜるように動く。それは、力カシに撫でられたことを思い出された。

やがて離れた手は、そのままどんどん離れて行つた。別れの挨拶もなしに、金髪の大人の背中は病室から消えて行く。

結局何だったんだろう。よくわからなかつた。確かめるように頭を触ると、彼の体温がまだ残つてゐるよつに感じた。

16・5 閑話（後書き）

閑話ですので本編には特に関係ありません。

更新遅れて申し訳ありませんでした。この先も少々更新頻度はまちまちになるかと思います。詳しくは活動報告にて。

三代目火影、猿飛ヒルゼンは咥えた煙管から深く煙を吸い込み、きつい煙を肺から吐き出した。吐き出した紫煙の向こう側で苦い顔をしている男の顔を見て、さらに肺を空にするように息を絞り出す。あちらまで届いたらしい煙の匂いに彼が眉を顰めたのが見えたが、気にする用件ではない。

「あの童^{わっぱ}か」

「ええ

ヒルゼンが確認のために言つたそれに、男、四代目火影である波風ミナトは短く答えた。その手には一枚の書類。“あの子供”についての報告書だという。里への侵入者ではないかと疑われている子供だ。

ナルトと名乗った子供は、金髪碧眼と特徴的な頬の痣を持つていた。それは、四年前死んだはずの波風夫妻の子供と同じ名前、同じ特徴だ。ミナトがその子供と会つた直後の反応を考えても、相当の衝撃を受けるほどにかの子供は彼らの息子と似ていたことが想像出来た。

その子供の処遇についての討議が行われたのは、つい先日のことだ。相談役の長老や暗部のダンゾウは厳しい処分を提案してきたが、ヒルゼンはどうしてもそれを受け入れ難かつた。侵入者と疑われているが、なまじ状況証拠しか揃っていないし、子供にしても子供過ぎる。会議の話題が子供を拘束する方向へ進む中、ヒルゼンはもつ

と冷静な判断を仰ぐように訴えた。あの子供が里に侵入したところで何が出来るのか、そもそも本当に侵入者なのかも疑わしい、と。

結界班が出したチャクラの乱れが間違いという可能性も、決してゼロではない。過去にそういう事例は幾つも存在している。

そんな風に、理由は幾らでも作ることが出来る。ただ、ヒルゼンはその子供を犯罪者にしたくなかった。ミナートの様子を見ると、そのままの処分をすることは時期尚早に思えるのだ。

ミナートは、ナルトと会った直後から明らかに様子がおかしい。日々の仕事は普段通りに行っているようだが、時折ぼんやりとしているのを、たまにしか会わないヒルゼンですら見咎めた。ナルトによつて心が乱されているのは明らかだ。その理由も、確信はなくとも想像はできた。

ミナートは、本心ではあの子供を処分などしたくないはずだ。会議の最中ほとんど発言をしない彼の表情からそれを察し、子供の拘束を考え直すように訴えたが、結局はそれも無駄に終わつた。火影の座を退いた己の発言力など、そんなものなのだ。

しかし、最終決定が下されるその日に、四代目火影のその口から宣言された。

「あの子供は里の管理下に置くが、拘束はしない」

と。

ミナートを動かす何かがあつたのかと邪推したが、それを知りたいとは思わなかつた。ミナートが自ら出した決断だ。火影の判断に間違いはないと信じるのが、里に住む忍としての義務だろう。

そして今日。太陽がまだ登りきらない時間帯に、ヒルゼンはミナトに呼び出された。彼の手に握られている書類からあの子供についての話題だとは思つたが、彼の苦々しい顔から何の用件なのか想像が出来ない。

たっぷり間をおいてから立ち上がったミナトは、僅かにヒルゼンとの距離を詰めると、ようやくその重い口を開いた。

「あの子供が、もうすぐ退院するんです」

「それは、いいことだな」

あの子供が見つかり、里の病院で療養を始めてからもう一ヶ月近い。確かにそろそろ退院してもいい頃だな。

「ただの子供なら孤児院に入れる所なんですが、事情が事情なので。
……退院後の住居が決まってないんです」

「なるほどね」

何となくだが、呼びだされた用件が読めてきた。

「それでお頼みしたいんですが、三田様と奥方様に、あの子供の住居を提供してはいただけませんか？」

そこで世話をしろ、とまでは言わないあたり、ミナトの火影としての葛藤が見え隠れする。ヒルゼンは煙管の吸い口を歯で噛みながら、ただでさえ皺が寄つた顔をさうに皺だらけにするように眉を顰めた。

「それは構わないが……」

お前が不満そうだ、とは言えなかつた。見上げた彼は未だ何かを迷つてゐるよう見える。さすがにその迷いが何なのかはヒルゼンには測りかねるが、そんな顔をされては素直に了承出来ない。

「少し考え方をしてくれ」

結局そんな無難な答えが口から滑り出た。

“百聞は一見にしかず”。

そんな諺があるが、まさにその通りだと視線の先にいる金髪の子供を見てつくづく思つ。金髪の子供は、ミナトの妻であるクシナに抱かれてぐっすり眠つてゐる。四歳だと考へても幼すぎる顔が、寝顔になるとさらに幼く見えた。報告でよく似てゐるとは聞いていたが、まさかここまで似てゐるとは。ミナトが動搖するのも無理はない。

ナルトが入院している病室を訪れたヒルゼンは、そこでクシナに抱かれて寝てゐるナルトを見つけて様々な意味で驚いた。あまりにもナルトが四年前に死んでいた“ナルト”と酷似していることもそうだが、クシナがその子を抱いていることが一番衝撃的だ。クシナがナルトと関わつてゐるとは思わなかつた。ミナトがそれを許す

とは、思えなかつたのだ。

「クシナや、お前！」と何をしておる」

ひからに背を向けて座つてゐたクシナは、ヒルゼンの声にぱつといちらに振り返つた。しばらく見ていなかつたが、前に会つた時より血色が良く見える彼女は、ヒルゼンへにこりと微笑む。

「三代目様、お久しぶりです」

立ち上がらず小声で返された言葉は、ナルトを氣遣つてゐるからだろう。子供の背中を優しく撫でるその姿は、その子供の母だと言われても何の違和感もない。

「この子を寝かしつけていたんですよ」

さも当たり前のよつとせざる。どうこう経緯でナルトと会つたかは知らないが、どうやら彼女にとって、もつとの子供は庇護する対象であるらしい。愛おしげに頬をすりよせる彼女の表情が、ここ数年見ていないものに見えてヒルゼンは安堵を覚える。

（こんな顔が出来るよつになつたか）

彼女は自分の子供を失つてから、表面上は明るく振舞つていたが多少なりとも無理をしていると感じていた。ミナトという心の支えがあつても、愛おしい我が子を失つた喪失感は果たしてなかなか癒えることがなかつたのだろう。笑つてゐる影で今にも壊れそうな心を、ぎりぎりのラインで保つてゐた。そんな彼女が、幸せそうに頬を緩ませてゐる。

突然現れたナルトという子供は、彼女にとつては救世主だったのだろう。こんな風にクシナが笑うことが出来たのならば、それだけでナルトという子供には感謝すべきだ。

「その子が、ナルトか」

確認のために聞くと、クシナは頷いた。

「そつくりですよね。私も最初は驚きました」

それは彼女にとつては大した問題ではないのか、笑つて語られた。ミナトはそれにずいぶん悩まされているといつのこと、この差はどこから来るのか。

「三代目様は、どうしてここに？」

「ああ。ミナトに、退院後のこの子の世話ををしてほしいと頼まれでな。顔を見に来た」

それを言えば、クシナは僅かに顔を曇らせた。

「そうですか……」

クシナからすれば、愛おしい我が子と同等にも考えている子供を取り上げられるのだ。里に罪人として拘束されるという事態を免れただけ大分マシだが、結果として彼女の手から離れていくことには変わりない。

「嫌か？」

「……いいえ。私にこれ以上我を通せる資格はないので

「どうこうことだ？」

クシナは一時ためらう様子を見せた後、静かにヒルゼンを見上げた。

「私が頼んだんです。ナルトを、罪人にしないでほしいと」

?

17 (後書き)

三代目登場です。

ナルトを拘束するという意見を急に降ろしたミナトの背景には、クシナの進言があったのか。驚きはしたが、意外には思わなかつた。あの男が意思を変えることは稀なことだ。そのきっかけとなつたのが彼女ならば、納得できる。

ヒルゼンはベッドサイドに放られていた椅子のひとつに座り、ゆっくりと彼女の隣に腰を据えた。ふと横を見ると、クシナの腕の中で安心しきつた様子で眠るナルトがいる。ナルトはヒルゼンたちが会話をしている中でも起きる気配はない。

ヒルゼンはナルトから視線を逸らし、窓の外を見つめながら口を開いた。

「なるほどのお」

「……あの、三田様」

「なんじや？」

クシナは優しくナルトの背中を撫でる手はそのままに、じぢぢを見ずに言つ。その瞳には確かな決意が込められているように思えた。横目にもその薄緑色の瞳に宿る炎に気付き、ヒルゼンは胸に確かに思いが溢れてくるのを感じた。

「私からも、ナルトのことお願いしてもよろしいでしょうか？」

そう言いながらも、子供の背中をぎゅっと抱きよせる彼女からは、「離したくない」という気持ちが伝わってくるようだ。だからこそ、そう言った彼女の気持ちは尊重すべきで、その言葉を否定することはできない。だが、確認せずにいはられなかつた。自分で溢れ出た思いに、結論をつけるためにも。

「それでいいのか？」

「はい」

すぐさま返された返事に強い意志を感じることが出来て、ヒルゼンは深く頷いた。未だ眠りの世界をさまよつているナルトの金色の髪を優しく撫で、ゆっくりと立ち上がる。

「お帰りになるので？ナルトとは話して行きませんか？」

「ああ。少し急ぎの用もあるのでな」

「急ぎの用、ですか？」

訝しげなクシナの問いか僅かに微笑んで答えて、ヒルゼンは彼女と子供に背中を向けた。急ぎの用が出来たのは本當だ。これから、四代目火影の元に向かわなくてはいけなくなつた。

*

ミナートは、カカシの報告書により寄せられたナルトが近々退院するという報せを、火影室のデスクに腰を据えて改めて見返していた。資料に書かれた墨字を何度も目で追い、この先の処遇の判断を仰ぐ文面にため息を吐く。

里にとつて要注意人物であるあの子供は、現状として孤児だ。ただの子供ならば孤児院に入れるのが妥当だろうが、疑いが晴れない以上、その処置は孤児院の子供たちを危険にさらすことと同義だ。何より、監視が付いている人間をあのように人が多い所に四六時中置いておくのは効率性に掛ける。

だからと言つてカカシとともに生活させるのは、さらに難しいだろう。あれは毎日里にいるわけではない。四歳の子供の保護者としては不十分だ。だからこそ三代目火影であつた猿飛ヒルゼンに、あの子供の世話を頼んだのだ。

彼にはいきなりナルトの処遇を変えたことについて、ダンゾウや長老たち上層部を説得するのにかなり尽力してもらつたので、これ以上あの子供について負担を掛けるのは忍びなかつた。だが、それでも複雑な事情があるナルトは、信頼できるヒルゼンに任せせるのが一番だと思ったのだ。

すぐに快諾はしてくれなかつたが、あの方ならばきっと引き受けてくれる信じていた。だというのに、急に火影室に現れたヒルゼンは、口に不敵な笑みを浮かべてミナートに「否」を突き付けてくれる。

「三代目様、もう少し考えてもらひえませんか」

「もう十分考えた結果じゃ。ワシの考えは変わらん」

煙管の煙の向こう側、そいつのヒルゼンはなにが楽しいのか口端を上げている。細められた田はギラリと光っていた。長年忍大國最強の木の葉隠れを引っ張ってきた御仁の鋭い眼光は、年かさを重ねて皺が増えても変わらない。

「この皿をしたヒルゼンには、彼に比べてまだまだ若輩であるミナトは絶対に敵はないのは経験則から分かっていた。だが、どうしてもこれについては譲れないところがあった。彼に面倒を見てもうつのが一番だと、今里をまとめているミナトが考え方めたのだ。何としても首を縦に振つてもらわなければ困る。

「お前の家で養えばいいだらう。若夫婦一人に、あの家は広いじゃねえつて」

苦惱するミナトを余所に、ヒルゼンは呑気に煙管を握りしながら言つた。

「あのですね、三代目様……」

言いかけて、ミナトはその言葉を飲みこんで手のひらで顔を覆つた。どんな言葉を掛けても彼の考えがそう簡単に変わるとは思えない。彼にイエスと言わせるには、一体どうすればいいのだろうと考えるが、里いちばんのキレ者である自分の頭にいい案は浮かんでこなかつた。

そうして頭を抱えていると、火影室の扉が唐突にノックされた。唐突だと感じたのはミナトの主觀である。それほど周りに気を配っていないなかつたのだ。

悩みの種を増やしてくれたヒルゼンは、その気配から誰が来たのか悟つたらしく勝手に「入れ」と許可を出している。

「失礼します」

入ってきたのは案の定、カカシだった。手に封筒を持っているところを見ると、新たな報告書を持ったのだろう。ヒルゼンが居ることに多少不思議そうな顔をしたが、カカシはいつも通り、型どおりにこちらに書類を渡してくれる。受け取ったそれはデスクに置いた。今はすぐに田を通す気になれない。

それを見ていたヒルゼンは、いいことを思いついたとでもいうかのように手を打った。

「そら、カカシを頼つてみたらどうじや？」

「三代目様、それはですねえ……っ」

火影の会話にいきなり自分の名前が挙がって、カカシはさらに不審げに眉を潜めた。

「カカシはナルトに相当目を掛けているそうじやないか

「え、ナルト？ ナルトがどうかしたんですか？」

ナルトの名前にカカシは耳聴く反応して、里の上層部同士の会話

に参加してきた。それまで会話の内容には反応しつつも邪魔をしないように我関せずとしていた彼だが、ナルトの名前は無視できないらしい。

「ナルトの退院後の住居についてだ。カカシ、お前ナルトを預かる気はないか」

ヒルゼンは親切にもカカシの問い合わせに応えていた。

「……そうさせていただけるのならば、俺は願つたり叶つたりなんですが」

一瞬目を見開いた後目を伏せたカカシは、判断を仰ぐためか視線をこちらに向けてくる。ミナトは否定の言葉を述べるために、その視線から目を逸らした。

「駄目です。カカシは多くの任務を抱えていますし、独り身です。まだあの子供は小さいのですから、キッチンとした保護が必要なんですよ。カカシでは不十分です」

それを言つと、カカシは俯いて考え込んでしまう。自分が子供の保護に向かない人間であることは自覚しているのだろう。

カカシはこの里の中でもすば抜けて優秀な忍だ。代わりになる人材は今のところいない。それを思うとカカシは強く出られないのだ。彼は自分が里の駒のひとつであることを分かつてはいるんだろう。

しかし、それをあざ笑うかのようにヒルゼンは鼻を鳴らす。

「カカシが任務で出掛けている間は、クシナに任せればいいだろう。

ナルトはすいぶん懷いているようだったが？」

今度はカカシが手を打つた。

「ああ、なるほど。それは名案で」

「ちょっとーー。」

進みそうになつた話を、ミナートは手を上げて必死の思いで静止した。二人には胡乱気な視線を向けられる。そんな風に見られるいわれはないはずだが。

「俺は反対です。……正直、今クシナが病院に通つてることだって賛成はしていないんですよ」

「まあ、固い」と呟つた

「そう、言ひ問題ではありません」

ミナートが食い下がると、ヒルゼンは呆れかえつたようにため息をついた。ため息をつきたいのはこつちだ。いくら先代の火影とは言え、先代は先代だ。里に関することを現代の火影の意向を無視してまで決める権限などない。無理難題をあっさりと片付けるなど、彼が猿飛ヒルゼンでなければ言つてしまいたいところである。

眉をひそめるミナートを余所に、ヒルゼンは煙管を一口含むと、紫煙を吐き出しながら言つた。

「火影としての大義名分が欲しいならば、ナルトの監視役をしてい るカカシに預けた方が、効率がいいと考えたらどうじや？クシナの

ことならば、新たな監視役として任務を言い渡せばいい。あれも今は前戦に出でていないとほいえ、一端の忍だ

「それは……」

「お前だって、あの童を邪険にしたいわけじゃないだろ？」「

それを言われてしまえば、否定しきれない。

「とにかく、何を言われてもワシの考えは変わらん。あの童わっぱについて、ワシを頼ることはやめるんじやな」

「三代目様！？」

この話は終わりとばかりに火影室の扉へ向かうヒルゼンの背中をミナトは呼び止めたが、彼は止まることなく、年齢を重ねても一流の忍であることがわかる所作で部屋から辞していった。残されたミナトとカカシは、思わず互いに目を見合わせる。そしてミナトは大きくため息をつき、カカシは苦笑して肩を竦めた。

椅子に深く座り直して、ミナトは考えた。ヒルゼンがあの子供を保護してくれないとなると、選択肢は大幅に少なくなる。ダンゾウや長老方は、あの子供に対してかなり風あたりが強い扱いをしそうだ。それはミナトの望むところではない。

しかし、だからと言つてなにも事情を知らない忍夫婦の所に里子のように預けるのも躊躇われる。一時は里で拘束し、罪人として扱うことが決まりそうになつっていた子供だ。事情を話したらダンゾウや長老方と同じ結果になるだろう。それを思つからこそ、ヒルゼンは最適任者だったのだが

ヒルゼンにこの話を拒否された時点で、答えは一つしか残っていないことに、ミナトはそこで気付いた。

「……カカシくん」

「はい、火影様」

話しかけられるのを待っていた、とでも言いたげな声のトーンに、ミナトはまた大きくため息を吐きたくなつた。それを何とか呑み込んで、一つ指示を出す。

「あの子供はお前が預かれ。それで……お前が居ないときは、クシナに任せることにする」

「はいー。」

笑顔で答える彼を見て、こんなに嬉しそうに笑うカカシを見るのも久しぶりだな、とどうでもいいことを思った。

1-8 (後書き)

長らく更新を休んでしまって申し訳ありませんでした。これから少しずつ更新頻度を上げていきたいなあと思っていますので、よろしくお願いします。

ミナトにナルトの保護と世話を任務として言い渡されてから数日、ナルトが退院する日がやつてきた。カカシが小さな花束片手に病室に向かうと、既にクシナと一緒に小さな鞄に荷物を詰めているところだった。

入院した時は荷物なんてあつてないようなものだったが、カカシやクシナが買い足した物のおかげで、小さなカバンが膨らむ程度に増えた。

「カカシニーちゃんーおはよーー！」

「ああ、おはよー。クシナさんも、おはよーござります」

「おはよー、カカシくん」

クシナは晴れやかに微笑むと、ナルトのためにと買つたりュックの口を閉じた。彼女はミナトによつてナルトの監視役を命じられ最初は戸惑つたようだつたが、要はカカシが里にいない間の保護者となることにすぐに気付いたらしく、今は目に見えて上機嫌だ。

ナルトはじつとしていられないらしく、窓の外を見たり、クシナのそばをうろついたりと忙しい。今日退院であることはずいぶん前に知られており、そしてカカシの家に住むことになつたこともナルトは知つている。久しぶりに病院の外に出られるのが嬉しいのだる。

まだ腕は完治していないのではしばらく通院しなければならないが、

病院の外にいるのと中にいるのとではすいぶん違うはずだ。

「ナルト、あんまりとつりひょうしていると転ぶわよ」

シーツを撫でていたクシナから注意が飛んでも、ナルトは気にした様子はない。ぎりぎり「わかつたってばよー」と返事が返ってきたが、うずうずしてしょうがないと言った様子だ。

退院準備も整つたのか、クシナに小さな鞄を手渡された。これら力カシの家に向かうことになるのだから、自分が持つているべきなのだろう。

「ナルト、行くよ

「うん！」

力カシが呼ぶと、ベッドで枕を叩いていたナルトが一いち方に飛んできた。これだけ元気があるのならば、腕もあつという間に治る気がする。力カシが思わず苦笑すると、クシナも似たような顔をしていた。

力カシが暮らすのは“上忍寮”と呼ばれる独身寮だ。一人で暮らすには部屋数も広さもそこそこあり、風呂とトイレと台所が付いたなかなか立派な物件である。上忍専用だけあって、侵入者を察知する結界まで張つてある重装備な建物だ。

しかし、この上忍寮、入居条件が「独身であること」のがちよつとした問題で、ナルトを預かることが決まった時は大家と少しばかり揉めた。独身寮ということは、大体において一人暮らしが原則なのだ。力カシは独身には変わりないが、子供を預かるとなると事情は変わってくる。

しかしまあ、里の最高権力者であるミナトの鶴の一聲で何とかことは収まつたが。それでも隣人から騒音等の苦情が来たら即刻引つ越すこと、と条件を出されてしまった。今はいいが、早めに新しい住処を見つけた方が賢明かもしれない。

我が家の中を開けながらそんなことを考えつつも、力カシについてきたクシナとナルトを招き入れるために扉を開けた。ナルトはばたばたと無遠慮に上がり込み、クシナは「お邪魔します」と一礼して中に踏み込んだ。さすがにナルトのような無遠慮さはないが、彼女は興味を隠しきれない様子できょろきょろと中を見まわしている。

「へー、ここが力カシくんの家か。生活感ないわねえ」

率直な感想なのだろうが、飾り気のないクシナの言動は時折胸に刺さる。

確かに、最近の力カシは、この家に風呂に入つて寝るためだけに帰つていた。それに、もともと自分の持ち物には執着しない方で、使わなくなつた物はすぐに捨ててしまつたため、我が家は我ながらどこか閑散としている。

その物が少ない空間を、小さいナルトがちょこちょこ動き回つていた。

「カカシにーちゃん、オレビニで寝るのー!？」

「オレのベッド。そり、まずは手を洗つてうがい。ね?」

「はあー……洗面所どこだつてばー?」

「あー、ルーフルーフ」

部屋の真ん中で「早く案内しろ」とばかりに立てるナルトを引っ張って、洗面所で手を洗わせてうがいをさせた。ついでに自分も手を洗つて居間に戻ると、こちらを見ているクシナと田が合つ。彼女はくくっと小さく笑うと、洗面所の方へ駆けた。

「私も洗つてくるわ」

小さく手を振つて去つていく背中がちょっと憎めしい。あれは絶対笑われた。独身でまだ成人もしてないくせに、所帯じみていると笑われた。そうに違ひない。

その後、クシナが手伝つてくれたおかげで、ナルトが生活できる環境は思つたより早く整つた。事前に買っておいた子ども用の椅子や、食器類、その他もろもろを適切な所に配置していく彼女の姿に、主婦は偉大だと妙に感心してしまう。自分ではそこまでうまく出来ないだろう。

さらに夕飯まで作つてもらい、今日一日はクシナに世話になりっぱなし。彼女が作った肉じゃがに箸を伸ばしながら思つた。

ナルトは初めて食べるクシナの手料理にご満悦の様子だ（夕飯の

リクエストを聞かれ迷いなく「ラーメン！」と叫んだ件についてはすぐに却下されていたが）。子供にも食べやすいようにひき肉で作られた肉じゃがはおいしい。ずっと病院食だったナルトからすると、さらに格別なものがあるだらう。

「おいしい？」

「はい」

「うあ～ってあよー」

口にものが入ったままのナルトの科白は、解明不可能になつていった。自然、クシナと苦笑いを交わした。

クシナが帰り、夜ももう更けてきた。ナルトを風呂に入れたカカシは子供を寝かしつけた後、一人晩酌をしていたが、ふつと思いつ出されることがあつて傾けていた杯をテーブルに置く。

ナルトの処遇が正式決定した際、ミナトに言われたことだ。

『あの子供を見逃したわけじゃない。今後、尋問班を使って調べられることは全て調べるから、そのつもりでいろ』

自分の判断が気に喰わないと言いたげな科白は、彼の表情だけを思い出すなら笑えるものだったが、内容は力カシにとつてはあまり好ましくない。それでも受け入れなくてはならないだろう。ナ

ナルトの監視を任せられている者として、ナルトが里にとつて不確定要素であることは理解している。

それに、単純に興味があることではあった。もし自分がナルトと何の関連もないただの忍としてこの任務を任せていたのならば、率先して協力しただろうと予想できる程度には。

果たしてナルトが何者なのか、非常に興味深かつた。

(……試してみてもいいか)

その思いつきは、ほんの少しの好奇心からだった。

ナルトの前では外したことがほとんどない額当てを外し、テープルに置く。普段は隠している赤い左目、写輪眼を外気に晒した。途端感じる強制的なチャクラの流れをいなしながら、ナルトが寝ている寝室へと足を向ける。

電気が点いている居間と違い、寝室は薄暗かつたが、ナルトの金髪は暗闇の中でもすぐに見つかった。赤い目を細めるとナルトの中のチャ克拉の流れが見える。まだ鍛錬などしたことないのだろうとのチャクラは、忍でない一般人のそれと変わらない。

ゆっくりと近づいてベッドに腰を掛け、ナルトの額に手を当てる。子供の体温は高い。カカシのそれより幾分温かいぬくもりが、薄い皮膚に染みわたるようじんわりと伝わってくる。

これでなにがわかるというのか、そう自問しながらも、カカシは写輪眼にチャ克拉を流し込んだ。何もわからないならわからないで、やはりただの子供だったのだと納得するまでだ。

しかし、カカシの予想に反して、そうしていると“中”に踏み込めるような妙な感覚がした。不思議な感覚だった。肉体でもない、自分の意識でもない何かを、ズブリと中に差し込んでいくような、言い表すことが難しいその感覚。沈み込むようにそれに身を任せていると、左目のみにしていた視界が霞む。

いや、霞んだどころではない。乱れた。目の前の景色が、まるで色を混ぜた絵具のように歪んだのだ。同時に頭に鈍い痛みが響く。それに耐えながら、視界を埋めるぐちゃぐちゃしたそこから何か読み取れないかと目を凝らしていると、それが一瞬途切れ、鮮明な色が現れる。

赤い空間。何もない、赤い空間が見えた。

赤いその先に、何かがある。

鉄の壁ように、見えた。

「……っ！」

突然バチッと、何かが弾けたような音がしたかと思つたら、目の

前にあるのは赤い空間ではなく、薄暗い寝室で寝ているナルトだ。気が付けば額にはべつとりとした汗が浮かんでおり、息も荒い。ひどい疲労感がして、今にも瞼が落ちてしまいそうなほど眠気が襲ってきた。

「く……あ……」

カカシは、そのまま倒れ込むようにナルトの横に沈み込み、頭に浮かんだ疑問を噛み碎く前に意識を手放した。

*

『……今まで来れなかつたか……。未熟者め』

19（後書き）

更新遅れました・すみません；

ちょっとと話進みましたかね。

写輪眼の描写や設定は私の想像が百パーセント反映されていますので、あまり参考にしない方がいいです；

すっかり夏の気配が消え、その残り香さえ冷えた空気がどこかへ持つて行ってしまったある朝。今日は一段と寒く、天高くある日差しも「寒い」と言って凍えているように一段と白い。その太陽を手をかざして見上げ、クシナは笑みを深くした。

クシナは、今日と言ひ口が来るのを待っていた。昨夜はまるで遠足を控えた子供のように眠れなくて、隣のミナトから「君が寝付かない」と落ちつかない」と文句を言われるほどだった。だつて、今日が待ち遠しくて仕方なかつたんだ。

うきうきと弾む気持ちを隠す気もなく、物干し竿に洗濯物を吊るす手も軽い。もちろん、この上機嫌には訳がある。

今日から、カカシが泊りで長期の任務に就くのだ。と言つひとは、ナルトはその間波風家に泊ることになる。

今まではカカシの任務が泊りになることはあまりなく　　と言ふか暗部の仕事が多かつたため、夜に出掛け日が登る頃には帰つてきていたらしい　　クシナがナルトと会う機会が、あの子が入院しているときから比べるとずいぶん減つた。たまに昼間に会いに行つていたが、人妻とはいえ独り暮らしの男の家にまだ若い（と信じてる）女があまり頻繁に行くのは良くないし、ナルトのこともあってかミナトが好色を示していない。クシナなりに双方に対し遠慮して、あまりナルトに会つていなかつたのだ。

だが、今日からしばらくはナルトと一つ屋根の下だ。これが樂しみでしかたない。

「楽しそうだねえ……」

ミナトの声に背後を振り返る。縁側に腰を掛けた彼は、今日は珍しく休みが出来たらしく、これを好機とばかりに忍具の点検と整備を行っていた。彼特有のクナイが、縁側にずらつと並んでいる。朝日に照らされて、クナイの鉄が光を鈍く反射している。

ミナトは、自然といやけてしまつクシナの顔を見て非常に微妙な顔をした。

「ミナトは嫌?ナルトが来るの」

クシナは彼の横に腰掛けて問うた。彼が出した命令とはいえ、彼自身自分の命令に対しあまり納得していないのはまるわかりだ。嫌と言われてももう変えようがないが、一応だ。

クシナの問いに、ミナトはため息を交えて答えた。

「別に嫌じゃないよ。でもね、あの子供は警戒すべき対象なんだ。クシナも、その辺り理解してる?」

「してるしてる」

「ホントオ?」

疑わしい、と言いたげにミナトの目が細められた。実際警戒しているかと聞かれたら、半分はしている、と言った方が正しい。ナルトを我が子のように思つて大切だ、という気持ちがあるが、クシナの中の理性的な部分がナルトに対する疑問点を無視できるわけでも

ない。

あの子が何者か、今のところ分かつては一つもないのですが。監視役を仰せつかつた以上、そこをも明るみに出すのが、この里の忍としての役目だらう。

ミナトがクナイを縁側に置く金属音に顔を上げると、彼はそれらを布でひとまとめに片付けながら言つた。

「まあ、俺はあんまり関わらないよつとするよ」

「あら、どうして？」

火影としてあまり深入りしたくないのは分かるが、クシナとしてはミナトもナルトと仲良くなつて欲しいところだ。並べてみると、ミナトとナルトは本当によく似てゐる。これが親子じゃないのが不思議なくらいだ。

その二人が仲良く昼寝でもしていたら、それはクシナに取つて最上に幸せな光景だらう。

クシナが軽く夢想している横で、ミナトはきゅうと口を一文字に固めると、黙つてこう答えた。

「……あれは、俺のことが恐いみたいだからね」

「あなたの態度が悪いんじゃないの？」

率直な感想は、ミナトの顔を大いに歪めた。

「仕方ないだろ」

「……そりねえ」

言いたいことは何となくわかる。何と言つても、ミナトは火影なのだ。

ふと時計を見ると、そろそろ約束の時間だ。予定では、カカシがナルトを連れて来ることになつてゐる。

「やんせらへるわよ、どうする?」

「どうする? どうもしないよ」

「じゃあ一緒に出迎えましょ!」

「じゃあって、どう繋がったの今の会話で!」

そのとき、タイミング良く我が家への呼び鈴がピンポーンと小気味よく鳴いた。これは天が自分に味方した。

「さあ、来たよ。行こう!」

「いや、だから俺は……」

「いいから!」

渋るミナトを引つ張り起こして、その背中を押して玄関へと向かう。最後まで気が向かない様子だったミナトだが、玄関まで辿りついて観念したのか逃げる様子はない。

それに笑つて、クシナはつかけを履いてたたきに降りた。玄関の引き戸の向こうには、長身の影と小さい影が並んでいる。小さい影の方が、待ちきれないと呟うかのようにぴょんぴょん揺れていた。

「今開けますよー」

二人に呼びかけながら戸を開ける。途端、ナルトがぴょんと跳び上がつてクシナに抱きついてきた。

「おばちゃん！久しぶりだつてばよーー！」

「久しぶりねー、ナルト」

よいしょ、とナルトを抱き上げる。まだ出合つてほんの少ししか経っていないが、その間に少し重くなつたような気がするのは、もともと細い子だったからだろうか。

「おはようござります、四代目様、クシナ様」

ナルトに続いて入ってきたカカシが、一応朝一番の挨拶といふことか、ずいぶん肩肘張つた挨拶をした。カカシがこういう態度に出ると、慣れていらないクシナはくすぐつたいといふか妙に照れるというか。とにかく、落ち着けないのであまりそう言つた態度は取つてほしくないところだ。クシナの中で、カカシはまだ生意気な少年なのである。

「じゃあ、よろしくお願ひします」

「ええ、任せました」

「まかされました！」

クシナの口真似をして、ナルトが胸を張った。こういった仕草が愛おしくて仕方がない。

カカシはクシナ達に深く礼をした後、一言葉を交わしただけで去つていった。任務の時間が差し迫つていたらしく、あまりゆつくりしていられなかつたのだろう。ナルトと一緒に、遠くなつていく彼の背中を見送つてから振り返ると、無表情にこちらを見てくるミナートと視線が合つた。

「ミナート、ナルトに挨拶」

逆じやないだらうか、と自分の言葉ながら思つたが、ミナートは僅かに眉を寄せただけで特に反論しない。反論しないと言つことは文句なしということだ。クシナはそう勝手に解釈して、彼を視線で促した。

「……おはよう、ナルト」

絞り出された声は、必要以上に起伏がない。自然に聞こえるか聞こえないかのギリギリのラインだ。同業者の忍からしたら、意識しているのが駄々漏れである。

ナルトは、挨拶されてびくつと小さく体を揺らし、少しの間の後口を開いた。

「あ、おはようだつてばよ」

彼の中でどのよつな葛藤があつたのかわからないが、ナルトの手がぎゅっとクシナの服を掴んだ。子どもの表情を見たら、どうやら恐がられているところのは本当らしい。そう言えども、ミナートとナルトが直接会つて話してくるのを見たことがない。ミナートが意識して避けていたのだらうか。

しかし、じうじてちやんと挨拶が出来るのだから、希望がないわけではないはずだ。

クシナは廊下に上がりながら、腕の中のナルトに向かって。

「ナルトは朝」はん食べた？」

クシナが話しかけたことで表情がほころんだナルトは、にんまり笑つて答えた。

「食べたつてばよー」

「じゃあミナートと遊んで。私ちょっと家の用事があつて

「えー？」

用事は終わつたといつよいにこちらに背を向けて台所へと向かつていたミナートが、勢いよくじりり振り向いた。そんなに大事だろうか？

クシナはナルトの顔を凝視してくるミナトにはんなりと、なるべく優しげになるように笑いかけた。ここで引けばこの先の生活でのパターンが決まつてしまつ。

「ミナートもナルトと仲良くなりたいでしょ？ナルトも、あのおっちゃん」と仲良くなりたくない？」

「えっと、オレは……」

迷っている、と忍の能力を使わなくともナルトの表情からその心情が読み取れた。それに思わず苦笑する。ナルトはまだ小さくして、どうやらクシナと一緒に直情型だ。分かりやすくていい。

「おっちゃんがいいなら、こいつでばよ」

「だつてか、おっちゃん」

ナルトの言葉に、ミナートおっちゃんは悩んでこらみだつた。眉間にしわを寄せている表情は、言つては難だが非常に滑稽である。

「……俺も、別にいいかも……」

「やひ、じゃあお願ひねー！」

煮え切らない彼に半ば無理やりナルトを任せて、クシナは残りの家事をこなす為に家の奥へと進んだ。少し強引だったかもしれないが、じうでもして一人きりにしてみないとには仲良くなれるきっかけは出来ないだろう。

二人の距離が少しでも縮むことを祈りつつ、クシナは簞を手に取った。

20 (後書き)

遅くなつて申し訳ありませんでした。気がつけばこんなに時間が
・時がたつの早いです。

台所の方へ消えて行く妻の後ろ姿を見送って、ミナトは深く嘆息した。自分と同じく彼女の後姿を見つめているナルトを見下ろして、さらに深く息を吐く。

「あー、もう…」

思わず漏れたその言葉に、ナルトがびくりと反応したのが見えた。それにまたため息を吐きたくなつたが、何とか我慢して居間へと向かう。すると、後ろから小さな足音が着いてきた。

わざわざ恐がっている相手に近づくことないだろうに。クシナに言われたからだろうか。

居間の畳に腰を掛け、片付けたクナイをもう一度広げた。これ以上調整する必要はなかつたが、この子供と正面切つて相手をする気にはならなかつた。ナルトもそれを感じ取つているらしく、ミナトが座つたのを見て少し離れた所に座つた。

(氣まずい)

ナルトの視線がこちらに突き刺さつているのがわかつた。彼も自分がどの距離を測りかねているのだろう。クシナやカカシのように堂々甘えられる相手とは思われていないだろうから、あちらから話しが掛けてくることはない気がする。

(……それもなあ)

自分勝手な考えに眉間に寄せた。

手に持ったクナイを傾けると、まだわずかに低い位置にある太陽に反射して鈍く光る。三叉に分かれた奇妙な形のクナイは、この里の多くの忍びの中で持っているのは自分だけだ。

そう言えばと、一昔前にカカシに一本やつたことを思い出した。あれは未だに彼の手元にあるのだろうか。

どうでもいいことを考えながらも、ミナトは近づいてきた気配に目を向けた。気付いていないふりをしていたが、ふと見れば金色の髪が、ミナトの肩の下辺りで揺れている。その視線は、クナイに注がれてぶれない。気付けば隣に並ばれた子供に、どう対応していいかわからない。

何をしているのだろうと覗き込んだナルトの顔には、「興味津々」とでかでか書いてあつた。

「…触らないでよ、危ないから」

「わかつたつてばよ」

一応一言釘を刺すと、ナルトは迷いなく頷いた。

そして、また無言。

(どうしようか…)

困った。落ち着かない気持ちを誤魔化すように、クナイを布で磨く。汚れ一つ着いていないそれに対して磨くことは本来必要ないが、手持無沙汰を解消するにはいい手だ。

三つほど磨いたところで、弱い力に袖を引っ張られた。ナルトの手によるその行為に驚いた。彼の警戒心が少しは緩んだと言つことだらうか。

その瞳は興味からかきらきら輝いていて、初めて見るその顔に頬が緩みそうになった。何とかこらえたが。

「なあ、これって“くない”だよな？」

「もうだけど」

彼の問いに頷くと、ナルトはさらに質問を投げかけてくる。

「でも変な形だつてばよーなんで？」

「ただのクナイじゃないからね」

「ふつーのどざつ違うの？」

「それは
」

説明しようとして、果たしてナルトにわかるだらうかと疑問が浮かんだ。どんなに頭がいい四歳児だらうと口で言つてもわかりにくいけばずで、実際に見せた方が煩わしくないだらう。

「じゃあちょっと見ていてね」

ミナトはクナイの束から一本取り出して、庭先の地面に刺さるよう投げた。ナルトはそれだけで嬉しそうに拍手したが、見せたい

のはここからだ。

素早く印を結び、チャクラを練れば庭先を見つめていた視界から、居間で呆けているナルトへと変わる。「飛雷神の術」という術だが、見た目も近くで見れば派手な術だ。子供が見れば喜ぶはずだ。

「すげーーー！」

案の定というか、ナルトの高い声が響いた。弾けんばかりの笑顔を見て、思わずたじろぐ。

（あーだめだ。ダメだダメだ）

視界を塞ぐように手を顔に当てた。

よくない、非常によくない。

ミナートは地面に刺さったクナイを抜いて、縁側へと戻った。ナルトが「それってどうやるんだってば！？」と聞いてきたが、無視をしてクナイを片手に持つ。

ナルトが寂しげな顔をしたのが見えたが、それも無視した。ミナートが下唇を噛んだことは、小さい子の子供にはわからなかつたはずだ。

ナルト置いて自室にもぐつてしまおつと廊下に出たとき、おもむろに玄関扉が音を立てて開いた。誰だ、とそちらを見ると、子供を二人連れた黒髪の女性がいた。方にはやけに大きな鞄を提げている。

「あ、おはようございます。四代目」

ミナトを見止めた彼女が頭を下げたのに応じ、後ろにいた子供の大きい方も頭を下げ、小さい方は兄だと思われる大きい方に頭を押さえられていた。

「ミコトちゃん、どうしたの？」

「遊びに来たのよー」

途端砕けた口調になつたミコトは笑つて、イタチは歳不相応の苦笑を洩らし、サスケは不思議そうに首を傾げていた。

2.1 (後書き)

間が空いたのに短い・申し訳ないつす

誤字が・・・誤字が (2011.12.8訂正)

子守の相手が増えた。

突然やつてきたミコトは、クシナと一緒に出掛けに行つた。庭で飯を一緒に作ってくれるらしい、材料の買い出しに行つたのだ。

そして、三人の子供の子守りをミナトに任せて行つたのだ。イタチに関しては既に下忍なので、子供と数えるのは微妙なラインであるが。

子守りを任せられたのはミナトであるが、実際に相手をしているのはイタチだ。子供の相手は子供に任せるのが一番である。今は、庭先で子供三人集まっている。

ちなみに、ミコトにはナルトのことをうずまきの姓を伏せて、ミナトの方の親戚だと誤魔化した。うずまきという姓だが、髪の色も目の色も自分と一緒にこの子どもが、クシナの親戚だと言い張るには無理があると思った結果だ。ミコトは少々不思議そうな顔をしたが、特に追求はしてこなかつた。彼女も忍だ、きっとなにかを察したのだろう。

イタチは何か言いたげだつたが、母親に習つて何も言つてこなかつた。まだ十にも満たないが、聰い子供だ。

縁側でぼんやり彼らを眺めていたら、おもむろにナルトとサスケがいがみ合い始めた。

「ちびのくせに…」

「おんながおー。」

そんな風に悪口を飛ばしている。一瞬のうちに喧嘩友達になったのか、とぼんやり思った。しかし、喧嘩をしていても五分後には笑顔で遊んでいるんだから、子供ってよくわからない。

ミナトは何となしに手に取った本を捲つて、妙に緊張した午前の頃理を過ぎることにした。

*

「ちーびー」

「うつせーつてばよーーー。」

弟があつという間に火影様の親戚と喧嘩を始めたのを見て、うちはイタチはため息を吐いた。ナルトという名で紹介された金髪の子どもは、どうやらうちの弟とそりが合わなかつたらしい。それとも、これくらいの年の男児はこんなものなのだろうか。

どう仲裁しようかと考えあぐねていると、なぜか一人の話題は自

分に移っていた。

「オレの兄さんはな、もつ[写]輪眼が使えるんだぞっ」

「しゃりんがんつてなんだつてば?」

「おまえそんなこともしゃりねーの?[写]輪眼はすぐーんだぞーえつとな……」

兄の「」とを自分の「」とのよつて胸を張っていたサスケだったが、その口の回りが途端に鈍くなる。うちはの人間とはいえ、まだ四歳の弟に[写]輪眼を説明する「」とはできないのだろう。

黙つて口をどがらせる弟に苦笑した。それでも兄に助けを求めるいあたり、この子なりの矜持があるらしい。

「なー、しゃりんがんつてなんなんだつてば?」

「う、うつせーーとにかく[写]輪眼はすぐーのー」

「それじゃわつかんねえつてばよー」

せりやあ解らないだろ? さすがに見かねて、イタチは助け船を出していくことにした。

「ナルトくん、[写]輪眼なら見せてあげるから、オレの目を見てて?」

「えー?」

「みせてやる」とねーよ?」

「別に見せるくらいで減るものじゃないからいいだろ？？」

納得いかない様子のサスケだったが、兄の言葉に逆らつつもりはないようで不満顔で黙り込んだ。

ナルトを見下ろすと、不思議そうな顔をしてイタチの目を覗き込んでいる。彼が期待しているか分からないが、その視線に応えるために両目を赤く染めた。途端に、回りのほんのすこしの埃の動きでさえ手の中に入り込んでくる。

黒かったはずの瞳が赤く染まったのを見て、ナルトは青い目を開き、「どうやったんだってば！？」と笑顔ではしゃいだ。その反応に、イタチではなくサスケが満足げだ。さつきは見せるなどいねて見せたのに、ヒイタチは何度目かの苦笑を洩らした。

「どうなってんだってば！？ オレにもできるー！？」

「これは血継限界で……」

「けー？」

四歳の子供には難しいか。

イタチにはこの力を子供にも分かりやすく説明できる自信はなく、誤魔化すようにナルトの頭を撫でた。

ふと、妙な感じがした。

説明していく感覚は、ナルトに触れている手から伝わっていく

るようだ。写輪眼を発動していなければ気付かなかつたであろうそのわずかなもの。何だらうかと首を捻り、興味本位にそれを注視してみた。

「イタチにーちゃん？」

ナルトの青い目が、イタチを訝しげに見上げているのがわかる。それを無視し、彼の頭に手を乗せたまま、訳の分からぬ何かに身を寄せた。

それは、落ちて行く感覚に似ていた。

身体ではない何か、意識に近い何かが違うところに落ちて行く。落ちた先は暗くて、一寸先も良く見えない。

(「JJはめどりだ?」)

その暗い中で、少し遠くに光るものを見つけた。ほんやりと光る

それは、人の形を取つてゐるよつに見える。

“それ”が、ゆづくつといひあひに近づいてきた。

『フガクのヒルの長男か』

機械でも通していよつよつな雑音混じりの声が、イタチを特定する情報を口にした。

『す、じ、ねえ、こ、こ、ま、で、ぐ、る、な、ん、て、賢、そ、う、だ、と、は、思、つ、て、た、け、ど、まさ、か、こ、こ、ま、で、と、は、』

お前は誰だ。

そう口にしたつもりだったが、音にはならない。

光る何かは、それでもイタチが言わんとしたことがわかつたらしく、僅かに笑つたようだった。

『オレのことは、君もよく知つてゐるよ。君が知つてゐるオレは、オレじゃなにけどね』

良くわからない。

ほんやりした“それ”が何なのか、さらに意識を集中させてみたら、僅かばかり輪郭が確かなものに見えた。

そして確かめることができたその存在に、目を見張る。

どうこいつだ?… しの子は何者なんだ。

イタチの問いにそれはさうに笑みを深めると、口元に人差し指を立てて言った。

『君は知る必要のない』とぞ

『うつこいことだ、教える。あなたは……

『君がここに来る予定はもともとなかったんだ。やつれと出で行くなさい』

イタチの言葉をさえぎつて、それはイタチに触れてきた。近づいてきた“見慣れた”金髪が、ぼんやりと揺れたように見えた。

浮上した。

その表現が正しいのかわからないが、ふと顔を上げたら先ほどの暗い空間ではなく、四代目火影の自宅の庭先だった。呆然と首を巡らせると、縁側には本を捲る四代目が居て、自分のそばにはサスケとナルトが立っている。

「兄さん…どうしたの？」

「ほんやつしてたつてばよ？」

一人が口々にそう言つ。あの僅かな時間、身体の方は自失しているらしい。

未だナルトの頭にのせられたままの手が目に入り、恐る恐る腕を引いて下ろした。

この子は何だろうか。あそこは、自分の感覚を信じるならば、この子の“中”にあつた。暗い空間に、ぼんやりと光り人影が一つ。

結論は出なかつたが、ガンガンと、頭の中で警鐘が鳴つてゐる。

この子供は危険だ。自分の中の本能的な何かが、そう告げていた。

イタチは、腰に提げられた袋に手を伸ばす。クナイの冷たい感触が、指先を舐めた。

22 (後書き)

のうのう更新ですみません；

細かいところ訂正 (2011.12.8)

視界の端に[写つた鈍い光を見て、ミナトは咄嗟にイタチのそばへと“飛んだ”。

イタチがクナイを取り出したのが見えたのは一瞬だ。予備動作もなしにナルトの喉笛を目標していたその切っ先が見え、動いた体はイタチを地面に引き倒していた。ミナトの体の下で呻くイタチの手から、ナルトの命を狙つたクナイを取り上げる。捻り上げた彼の腕が悲鳴を上げているのがわかつた。

「兄さん！」

「おっしゃん！ やめやめばよーー！」

まだアカデミーにも通つていらない子供たちには、何が起こったのか見えなかつたのだろう。口々にミナトを非難する声が上がつた。

「……四代目様」

イタチの黒い瞳が、何うよつてちらを見上げている。

「どうこつもりだ

低く聞くが、イタチは僅かに眉を寄せただけだった。

「ナルトくんは何者ですか」

答えるどころか質問を返してきたイタチに、思わず彼の腕を捻り上げる手に力がこもった。骨が折れるぎりぎりの力加減だ。痛みが走つたのだろう、イタチの顔が苦痛に歪む。

「……お前が知る必要はない」

ナルト達に聞こえぬよう潜めて言つた言葉に、イタチは僅かに目を見開き、そして何かを悟つたように細めた。

「あなたも、同じことを言つのか」

「……なに?」

彼にその言葉の意味を聞いた大そうとしたとき、横面に衝撃が走つた。何が直撃したのか、ぐわんと脳が揺れた気がして、身体がその衝撃に従い吹っ飛ぶ。

「ミナート……なにやつてんの……」

地面に無様に着地して顔を上げたら、いつの間にか帰つてていたらしいクシナとミコトが、イタチを起き上がらせていた。ミコトは心なしか顔が青い。サスケは今にも泣きそうな顔をしていた。

最後に視線をやつたクシナの握られた拳を見て、自分が吹っ飛んだ理由がわかつた。

どうやら、吹っ飛んだのはクシナの鉄拳が顔に直撃したかららしい。なぜか、昔からあの拳を避けられたことがない。鈍く痛むこめかみをさすつて起き上ると、ナルトが駆け寄ってきた。

「大丈夫だつてば？」

「ん…、まあ」

ずいぶん優しい子だ。心配されて悪い気はしなった。

「イタチ…、大丈夫？」

「……」

ミコトがそう聞いても、イタチは答えようとしない。

母を無視してイタチは、地面に座り込んでいたミナトに顔を向けた。ミナトは彼に近づこうと立ち上がったが、なぜかクシナがその間に立ちはだかる。我が妻ながら、その行動が理解できない。

「なに?」

不愉快を隠さず聞いて、クシナは難しい顔をして答えた。

「あなたのことだから、無意味にあんな」としないのは分かつてゐる。でも、ミコトのことも考えて、息子のあんな姿見たら、動搖しちゃうわよ、普通は」

「……」

つまり、少し間を置けと言つてゐるようだ。むすつと不満を顔に出すと、額をびしりとミコトにパンパンされた。

「痛い」

「とりあえず、事情は私が聞くから。…」
「…」

「イタチは帰らないで」

クシナはきゅっと眉を寄せると、小さく首を横に振った。

「あとで来てもらひこましょつよ。」
「…」

「イタチはもう立派な忍だよ。いつまでもそんなんじゃ

「だけど、まだ九歳なの」

ミナトの言葉をさえぎつてそう言つクシナが、ミナトと回じくら
い不安そうな顔をしてくることに気が付いた。彼女の肩越しに、イタ
チを抱き締めるミナトの姿が見えて、ミナトは肩を落とす。

「…わかつたよ」

「ありがと」

ミナトがしぶしぶ了承すると、クシナはぱつと笑顔になつてミナ
トの方に駆けて行つた。

結局その後ミコト達は皿をくと帰り、ミナトたちだけで昼食を取ることになった。その昼食の準備を手伝いながら、先ほど起こったことの概要をクシナに話すと、彼女はまん丸い目をさらに大きく広げた。

「イタチくんがナルトを殺そうとしたってこと? 本当に…?」

小声で叫ぶと言つ器用なことをしながら、これまで器用に野菜の皮をむくクシナの横で、ミナトは玉ねぎを刻みながら頷いた。ナルトが同じ室内にいるため、互いに小声と読唇術を併用しての会話だ。

聞かれてはいろんな意味でますい。

「たぶんね。イタチがどう判断してそう行動したかは聞くしかないけど、あの時イタチは写輪眼を発動していたから」「

「何か見た?」

「もう考えるのが妥当じゃないかな

ミナトはクシナと一緒にになって、台所の向こうへ、居間で寝転がつてカエル人形で遊んでいるナルトを振り返つて見た。そして互いに目を見合す。彼女の緑色の目には、疑問が渦巻いているように見えた。

「イタチくんが、あの子の何を見たって言つたよ?」

「それがわかつたら苦労しないよ。イタチに聞いてみないとわからぬい」

クシナの手から皮が剥かれたニンジンを受け取つて、それを刻みながら答えた。クシナは納得がいかないのか、ボウルに出した卵を溶く手つきが荒々しい。

「もひ……」

コシン

クシナがシンクにボウルを置く音が、妙に静かな屋内にこだました。ふと見た彼女は、いつになく暗い翳かげを負っている。

「……ねえ、ミナト」

「なに?」

「私、あの子を信じてるわ。だけど、時々ビビりやうもなく不安になるの。私どうしたら」

言いかけて、クシナはハッとしたように口元に手を添えた。

「じめんなさい、あなたに言ひことじやなかつた」

「……いや」

ミナトはもう一度、ナルトへと目を向けた。

会ったびに重ねる印象は、無邪気な顔で笑う素直な子供だと言つことだけ。彼が背負う不可解さがなければ、もしかしたらただの子供として見ることが出来たのかもしれない。

(早くイノイチに動いてもらひつ必要があるな)

山中家の彼の顔を思い出してから、ミナトは刻んだ二ンジンをザルに放り込んだ。

「今日は休みじゃなかつたの？」

「悪い、急に用事が出来たんだ」

昼食を取つた後、ミナトが急に仕事に出掛けと言つた。私服から忍服に着替えるミナトの横で、クシナは筆筒たんすから火影の白い羽織を取り出す。丁度昨夜出来あがつた火影の刺繡を改めて見返し、「よし」と白い布を撫でつける。

彼がこんな風に急に仕事を思い立つことは珍しいことではなく、特に驚かないし落胆は少ない。ただ、急なことに慣れてしまつた自分とは違い、いきなり動き出した大人たちにナルトは少々困惑氣味だった。こちらの様子を見るナルトの抱えたカエルのぬいぐるみが、彼の動搖を表すように見るも無残に握りつぶされている。

それに苦笑を洩らす暇ももられず、ミナトに羽織を渡し、そしてすぐさま玄関へ向かう彼の背を追つた。

「じゃあ、行つてくるね。夜はいらぬから

「分かりました。いつてらっしゃい」

クシナの声に背を押されて玄関の引き戸に手を掛けたミナトだが、その視線が何かに絡め取られたように止まつた。それを追うと、少し離れた位置からナルトがこちらを見つめている。

向けられた悩ましげな視線から、彼が何を思ったのかは読み取れない。

それから何も口にすることなく、ミナトは羽織を翻して去つていった。

ミナトが出掛けてしまらく経つた頃、不意に片頬を腫らしたイタチが訪問してきた。腫れた頬のことを聞けば、帰った先で事情を知ったフガクに折檻されたらしい。フガクならばナルトの存在を知っているだろうから、それ故の行動だろう。寡黙な彼が特に説教もなくイタチを折檻する様子が想像できた。

「謝りに來た」と頭を垂れる彼を、クシナは招き入れることにした。そのときナルトを自分の後ろに隠すようにしたのは、僅かでもじわりと滲む警戒心からだ。イタチはそれを一瞥した切りだった。

まだ赤く熱を持つ彼の頬に、保冷剤をタオルで包んだものを渡した。イタチは軽く会釈してそれを受け取り、クシナが案内した通り居間の卓の傍に腰を下ろした。

「先ほどは、申し訳ありませんでした」

クシナが飲み物を用意しようと背を向けるより先に、イタチは頭を下げた。そのまま頭を上げないので、クシナは仕方なく彼の向い側に腰を下ろした。ナルトは、クシナに習い横に座った。

「事情を、聞いてもいいかな？」

慎重に選んだ台詞を出せば、イタチがわずかに顔を上げた。

「…それなんですが」

彼は言い掛けで、何かを躊躇つよう、口をつぐんだ。

「どうしたの?」

クシナは、腹の底から持ち上がりつづく奇妙な不安を感じていた。イタチが何を思い“あんなこと”をしたのかわからない。だが、ミナト同様この子も何の理由もなく暴挙に出るようなマネをしないことは、彼の母の友人としてわかつていてのことだった。

だから、何か理由があつたはずだ。それは何か。何をうち
は一族が持つ「写輪眼」をもつて、イタチは一体何を見たのか。

(もし、それでナルトが里の“敵”だと判断されたら?)

クシナとて、ナルトが何者なのかは知りたい。だが、同時に怖くもあるのだ。全てがわかつたあと、待っているのが穏やかな日々であるとは限らないから。

気付けば速まった鼓動が、耳元でうるさく鳴っていた。どんな台詞が飛び出してきても良いように、下唇をきゅっと噛む。それでもしないと、氣丈に振舞つてはいられない気がした。

「そのことに關して、クシナ様と…ナルトくんにお願いがあります

躊躇いがちにイタチは言つたことは、クシナを十分に驚かせた。

*

四代目火影の奥方・クシナに頭を下げたまま口にしたことは、イタチにとつては挑戦だった。これを越えなければ、何もわからない。

「オレは、ナルトくんの中に何かを見ました。それが何なのか、オレにはわかりません。だから、……もう一度確かめさせてください」

それを言つたら、クシナはさり気なく横ナルトを腕で抱えた。それは、まるで子を守る母のようで、先ほど自分を抱きしめた母がイタチの脳裏に浮かんだ。

さしづめ、自分は悪役と言つたところか　　いや、むしろそのものだろ?。先ほどはその子供を殺そうともした人間だ。本来はこの家の敷居を跨がしてくれただけでも、ありがたいのである。

クシナの横にちょこんと座っているナルトは、話の内容がつかめないらしく、眉間にしわを寄せて首を傾げている。つい先ほどには

危険に見えたはずの子供は、こうして改めて見ると不思議なことに危機感を抱かせない。自分の弟と変わりない、忍の里で守るべき子供の一人と同じに思えた。

この子の中に未知の何がある。イタチは、それを確かめねばいけないと言う使命感に追われているかもしかつた。口を置かずには彼らの元に訪れたのだつて、きっとその所為だ。

「それは……」

言い淀んだクシナの表情を、頭を下げるまま盗み見る。そこには迷いの色が見て取れた。もうひと押ししようと、イタチはさらに頭を下げる。

「お願いします」

「イタチくん……」

無理な願いであることは重々承知だつた。そもそも、火影に“知る必要はない”と言われたことをあえて知りうとしているこの行為は、許されたものではない。さらに、火影を通さずに奥方であるクシナに直接これを頼むことも、筋が通つたことではない。

ここに突つぱねられればそこまでだ。イタチは、胸の中で燻ぶる使命感と、里の忍としての理性の折り合ひをつけるように、もう一度懇願を口にした。

「お願いします」

「……」

クシナが熟考している気配がある。迷いのときの表情は母のそれだったが、今はかつてのいちとして活躍したときの表情に見えた。

やがてさらなる迷いを示すように眉根を寄せた彼女だったが、イタチに顔を上げるようになり静かに口を開いた。

「ここでのことは、ミナトに報告するかは保留にします。口外しないことを誓える?」

「はい」

「わかったわ。……一度だけよ」

「 ありがとうございます」

イタチは、じとじと深く頭を下げた。そして上げた視線の先のナルトに、ふっと微笑みかける。

「 よりじく……ナルトくん」

24 (後書き)

ながい」と更新できず申し訳ありませんでした。一週間ほどパソコンに触ることができなかつたので：

これからはいつも通りペースに出来たらなと思つてます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0123v/>

幸せになれるかもしれない世界で

2012年1月8日22時53分発行